



TITLE:

「官は官を庇う」か - 清代後期における地方官の「上控」をめぐる
連絡・交渉 -

AUTHOR(S):

海, 丹

CITATION:

海, 丹. 「官は官を庇う」か - 清代後期における地方官の「上控」をめぐる連絡・交渉 -. 東方學報 2016, 91: 272-237

ISSUE DATE:

2016-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/224885>

RIGHT:

「官は官を庇う」か

—— 清代後期における地方官の「上控」をめぐる連絡・交渉 ——

海 丹

はじめに

第一節 『淡新檔案』に見る公的なやり取り

1-1. 事例紹介

1-2. 小括

第二節 『稀見清知府文檔』に見る私的なやり取り

2-1. 事例紹介

2-2. 小括

第三節 官僚間交渉プロセスにおける中間機構と専門機構

3-1. 分守分巡道による監督と連絡

3-2. 發審局による裁判と交渉

おわりに

は じ め に

「上控」(以下、上控をかぎ括弧をつけずに用いる)は、下僚の判断にもの足りなさを感じた民衆が、自らの揉め事をより上位の官憲の下に持ち込むことである¹⁾。民衆が訴訟を提出し官憲の處断を受けるように上控事案は處理されているが、地方官憲と官僚が上控をめぐって連絡・交渉をすることがよく見られた。その連絡ルートは、主に公的と私的との2つがある。前者は詳・稟・札など公文書であり、後者は官僚の私信である。地方官の連絡・交渉關係を検討すれば、上控の實態を窺うことができる。

本論文は、共同研究班「東アジア近世の地域をつなぐ關係と媒介者」の成果報告論文である。研究班の皆様から、多大なるご助言を頂きました。ここに、御禮を申し上げます。

- 1) 滋賀秀三は、上級機關が自動的に下級機關の判断を覆審する制度である上申手續に對し、上控手續は當事者が自發的に上級機關に訴える制度であることを明らかにしている。滋賀秀三「清朝時代の刑事裁判——その行政的性格。若干の沿革的考察を含めて」(同『清代中國の法と裁判』, 31 頁)を參照。

「官は官を庇う」か

命盗重案をめぐる通常の覆審過程以外、これまでの多くの研究は、官憲と官僚相互の間における連絡交渉関係については関心が十分に及んでおらず、それらの実態、とりわけ中間機構である分守分巡道と専門機構である發審局の上控をめぐるやり取りについては、管見の及ぶ限り未解明のままである。分守分巡道・發審局については幾つかの研究が行われてきたが、官僚機構の組み立てとその権限に焦点を当てて²⁾、地方官憲の上控處理については、不正行為か「官は官を庇う」と批判していることがよく見られる³⁾。

清代後期において、地方官憲は一體どのようにして膨大な上控案件を處理していたのだろうか。本稿は、4 事案を取りあげて地方官の上控に関するやり取りを検討し、官僚間の交渉プロセスの存在とその影響について考察する。

第一節 『淡新檔案』に見る公的なやり取り

『淡新檔案』には、福建の省レベルの官僚機構と臺灣に駐在する廳・縣が「分巡臺澎兵備道」（以下、「臺灣道」と呼ぶ）を通じて連絡を取っていたことが散見する。勿論その連絡内容は上控に限らないが、上控をめぐる公的なやり取りがよく見られた。

1-1. 事例紹介

事例 1 巡撫が分巡道を通じて廳に下げ渡した案件

同治 13 (1874) 年 3 月 18 日、竹塹城に住む黃君祥が、「黃阿愛らが約束に違反し、土

2) 清代の分守分巡道についての研究としては、古くは梁元生『上海道臺研究——轉變社會中之關係人物：1843～1890』という著作、また近年における苟德儀『川東道臺與地方政治』という著作がある。しかし、梁元生の研究では、上海道の外交の役割に焦点が当てられてきたために、裁判におけるその役割については、殆ど検討がなされていない。これに對し、苟德儀は、川東道の権限を網羅的に検討しているが、上控の実態については、なお十分に検討されていない。また吳吉遠『清代地方政府司法職能研究』は、分守分巡道を含める清代の各地方官憲の變遷とその裁判権限について全般的に検討し、上控制度の空回りの原因が專制政體であると指摘している（吳吉遠『清代地方政府司法職能研究』、北京：故宮出版社、2014 年、184～202 頁を参照。この著作の初出は、北京：中國社會科學出版社、1998 年）。一方で、清代の發審局とその裁判について、李貴連・胡震は、「清代發審局研究」の中で、發審局の設置過程や經費の出所などを明らかにしている。なお、上控をめぐる官僚相互の間における私的なやり取りについて、邱捷は、「知縣與地方士紳的合作與衝突」（2012 年。初出は 2006 年。同『晚清民國初年廣東的士紳與商人』、1～33 頁を参照）の中で論じているが、知縣を研究對象とするために、發審局の官僚にかかわる連絡交渉については、未だ十分に論じられていない。

3) 李典蓉『清朝京控制度研究』は、清代後期において各省の發審局による上控裁判を検討しているが、官僚の道德問題を中心として地方官の連絡・交渉について検討している。『清朝京控制度研究』、127～133 頁を参照。

地開墾の収益を分配しない」と淡水廳に訴えた。3月25日、淡水廳同知の陳星聚は黃君祥に「開墾した土地について、詳細に説明せよ」と命じ、竹塹清賦總局に税金の確定（「陞科」）を依頼することを決定した⁴⁾。4月11日、淡水廳は差役に黃阿愛らの召喚状を下した⁵⁾。その一方で、竹塹清賦總局に紛争にかかる土地（＝中港社濫坑仔）の「陞科」を依頼した⁶⁾。しかし、黃阿愛が出頭せず竹塹清賦總局も淡水廳に返事をしなかったため、裁判は滞ってしまった⁷⁾。

光緒2（1876）年12月2日、黃君祥は福建巡撫に上控した。巡撫は、臺灣道に事案を下げ渡して淡水廳に裁判を催促することを命じた。その指示が光緒3（1877）年1月18日に臺灣道に届き、2月21日に淡水廳に届いた⁸⁾。しかし、裁判は依然として滞っていた⁹⁾。

光緒4（1878）年5月～8月、黃君祥は繰り返し臺北府に訴えた¹⁰⁾。知府の林達泉と後任の陳星聚は、しばしば黃阿愛らを呼び出すことを命じた¹¹⁾。翌光緒5（1879）年2月、

-
- 4) 『淡新檔案』22302.1「黃君祥爲違約橫僥延限欺吞懇准嚴拘訊斷分管事」（吳密察主編『淡新檔案』第18冊，287～288頁）を参照。
- 5) 『淡新檔案』22302.3「淡水分府陳爲特飭吊契傳訊察斷事」（吳密察上揭書第18冊，288～289頁）を参照。
- 6) 『淡新檔案』22302.4「淡水分府陳爲移請勘丈報升事」（吳密察上揭書第18冊，289頁）を参照。
- 7) 『淡新檔案』22302.5「黃君祥爲偵控益橫懇迅比差拘訊斷分事」（吳密察上揭書第18冊，290～291頁），『淡新檔案』22302.6「黃君祥爲憲批嚴切差承不辦乞迅添差嚴拘斷分老孀有賴事」（同上，291頁），『淡新檔案』22302.7「淡水分府陳爲飭催吊契併傳訊斷事」（同上，292頁），『淡新檔案』22302.8「淡水分府陳爲移催彙勘丈報升事」（同上，292～293頁），『淡新檔案』22302.9「淡水分府陳爲飭催吊契傳訊事」（同上，293～294頁），『淡新檔案』22302.10「淡水分府陳爲移催彙勘丈報升事」（同上，294～295頁），『淡新檔案』22302.11「淡水分府陳爲改催吊契傳訊事」（同上，295～296頁），『淡新檔案』22302.12「一皂頭役湯才稟爲違仰查明吊契堅抗據情先行稟覆竝恩諭添察奪事」（同上，296～297頁），『淡新檔案』22302.13「淡水分府陳爲吊契催傳稟訊事」（同上，297～298頁），『淡新檔案』22302.14「單」（同上，298頁），『淡新檔案』22302.15「黃君祥爲勢惡欺吞銀業兩空乞速比差嚴拘斷分追租以救老孀性命事」（同上，298～299頁），『淡新檔案』22302.16「淡水分府陳爲吊契催傳稟訊事」（同上，299～300頁）を参照。
- 8) 『淡新檔案』22302.18「稟（黃君祥爲黃阿愛等不違合約將銀租田產霸吞稟請福建巡撫丁日昌究辦）」（吳密察上揭書第18冊，301～302頁）を参照。
- 9) 同年6月，書吏は召喚状の下書きをいったん提出したが，同知に卻下された。『淡新檔案』22302.19「淡水分府陳爲改催拘訊究辦事。〔批〕不行。六月十二（後略）」（吳密察上揭書第18冊，302～303頁）を参照。
- 10) 『淡新檔案』22302.20「黃君祥爲勢炎益烈銀吞業霸乞恩勒差拘訊究斷事」（光緒4年5月3日。吳密察上揭書第18冊，303～304頁），『淡新檔案』22302.25「黃君祥爲欺老孀幼藐法抗訊任告莫何乞恩比差拘訊究斷事」（光緒4年8月28日。同上，307～308頁）を参照。
- 11) 『淡新檔案』22302.24「臺北府正堂林爲改催拘訊究辦事」（吳密察上揭書第18冊，306～307頁），『淡新檔案』22302.26「臺北府正堂陳爲勒催集訊事」（同上，308～309頁），『淡新檔案』

「官は官を庇う」か

ついに黃君祥と黃斯傳（黃阿愛の息子）を呼び出した¹²⁾。

2月26日、臺北府は法廷を開き、臺北府の知府に昇進した陳星聚は、「今年から黃阿愛の埔地を3等分する。黃阿愛が2分を所有し、黃君祥が1分を所有する」と言い渡した¹³⁾。判決の後、黃君祥は「遵依結狀」を提出した¹⁴⁾。一方、黃斯傳は「遵依結狀」を提出しなかったため、50板の罰を受けた。その後、黃斯傳も「遵依結狀」を提出した¹⁵⁾。

3月21日、黃君祥は、黃阿愛と黃斯傳が處斷を守らないことを臺北府に訴えた¹⁶⁾。同日、知府は差役に黃斯傳を呼び出すことを命じた¹⁷⁾。3月23日、黃廷珍（すなわち黃阿愛）は臺北府に訴狀を提出した¹⁸⁾。3月29日、黃君祥は再び臺北府に訴えた¹⁹⁾。しかし、府は裁判を行わなかった。

案』22302.27「臺北府正堂陳爲勒催集訊事」（同上、309頁）を参照。

12) 『淡新檔案』22302.28「一皂頭役陳有站堂役陳水稟爲遵飭帶到稟訊事」（吳密察上揭書第18冊、309～310頁）を参照。

13) 『淡新檔案』22302.29「〔堂諭〕（斷令自光緒五年爲始將黃阿愛埔地作三份均分黃阿愛得二黃君祥得一份）案據黃君祥呈控黃阿愛違約橫僥等情前來、審得黃阿愛咸豐元年有向中港社劉合歡買過山埔、田園一所。因無水灌溉、招得黃君祥出本銀一百元開圳、約明毋論水田、埔園、山面、一切作參份均分、黃阿愛得二份、黃君祥得一份、咸豐四年同全合約字爲執。詎黃阿愛於圳成之後翻異、所有應分黃君祥一份、抗不分給、黃君祥屢次呈控、因而成訟。查黃阿愛以黃君祥銀開圳、既經約明分田、何得翻異、斷令照原約、黃阿愛得二、黃君祥得一份均分、自本年爲始。所有從前未分之租、應毋庸議、以斷繆纏、取具依結完案。黃君祥堂呈合約字發還」（吳密察上揭書第18冊、310頁）、『淡新檔案』22302.30「供（黃君祥黃斯傳二人之口供）」（同上、310～311頁）を参照。なお、黃君祥の訴狀や「堂諭」から、黃君祥と黃阿愛は中港社に「山埔田園」を共同して購入したことがわかる。中港社は平埔族の番社であり、その土地は番社に屬する田土であるとは言うまでもない。ただ、「堂諭」の中身は「埔地」ではなく「山埔」・「埔園」と書いていることから、ここでは、「埔地」が「平埔族の土地」ではなく「山中の丘陵地」を意味していることがわかる。前掲『淡新檔案』22302.1「黃君祥爲違約橫僥延限欺吞懇准嚴拘訊斷分管事」、また柯志明『番頭家：清代臺灣族群政治與熟番地權』（18頁）、林玉茹『清代竹塹地區的在地商人及其活動網絡』（66頁）を参照。

14) 『淡新檔案』22302.31「遵依結狀（黃君祥爲伊具告黃阿愛違約橫僥一案斷令仍照合約自光緒五年爲始將黃阿愛埔地作三份均分黃阿愛得二伊得一願甘遵斷）」（吳密察上揭書第18冊、311～312頁）を参照。

15) 『淡新檔案』22302.32「諭（責黃斯傳五十板如延加責）」（吳密察上揭書第18冊、312頁）、22302.33「遵依結狀（黃阿愛即子黃斯傳爲伊被黃君祥具告違約橫僥一案斷令仍照合約自光緒五年爲始將伊埔地作三份均分黃阿愛得二黃君祥得一願甘遵斷）」（同上、312頁）を参照。

16) 『淡新檔案』22302.34「黃君祥爲藐斷抗違抗則復霸乞提飭押具遵勘丈定界分管以杜後患而沾憲德事」（吳密察上揭書第18冊、312～313頁）、また『淡新檔案』22302.36「〔副狀〕（黃君祥爲黃斯傳抗不遵斷希圖仍霸呈請臺北府知府陳星聚究辦）」（同上、314頁）を参照。

17) 『淡新檔案』22302.35「單（黃斯傳）」（吳密察上揭書第18冊、313頁）を参照。

18) 『淡新檔案』22302.38「貢生黃廷珍爲得隴望蜀不訴不明事」（吳密察上揭書第18冊、314～315頁）を参照

19) 『淡新檔案』22302.40「黃君祥爲聽棍主謀捏詞混訴乞憲明察徹底嚴究以儆藐法事」（吳密察上揭書第18冊、316頁）を参照。

閏3月13日，黃君祥は新竹縣に訴えた²⁰⁾。新竹縣は4月20日に當事者の呼び出しを命じた²¹⁾。4月23日，黃阿愛が住む頭份街莊の「總理」たちは，縣に訴訟を取り下げることを求めた²²⁾。同日，黃君祥も黃阿愛も縣に「遵依結狀」を提出した。訴訟が終わった²³⁾。

事例2 家産分割をめぐる繰り返し訴えた案件

光緒8(1882)年10月23日，新竹縣に住む周許氏は，息子の周春草を代理人（「抱告」）として，「亡くなった夫（周冬福）の兄弟たち（周玉樹と周五娘）が家産を横領した」と新竹縣に訴えた。「不准」とされたが，11月3日，周許氏が再び周春草を「抱告」として，新竹縣に訴えた。再び「不准」とされたが²⁴⁾，11月13日，周許氏は再び新竹縣に訴え，ついに「准」を受けた²⁵⁾。12月1日，知縣の徐錫祉は關係者の呼び出しを命じた²⁶⁾。

12月8日，被告の周其昌（異名：周五娘。周冬福の4番目の弟）は，訴狀と證據（家産分割の契約書や周許氏に550元を支拂った領收書）を新竹縣に提出した²⁷⁾。12月14日，周國香（周冬福の2番目の弟である周玉行の息子）は新竹縣に訴狀を出し，「周春草は自家の財産をすべて使い，こうして惡事を企んでいる。勝手に北右營²⁸⁾に家産分割をめぐる訴えた」

-
- 20) 『淡新檔案』22302.41「黃君祥爲聽棍主謀藐斷復霸乞憲核案拘究辦事」（吳密察上揭書第18冊，316～317頁）を參照。
- 21) 『淡新檔案』22302.42「新竹縣正堂劉爲飭傳覆訊事」（吳密察上揭書第18冊，317～318頁）を參照。
- 22) 『淡新檔案』22302.43「頭份街莊總理謝煥光舖戶萬順號莊耆張金順房族黃載立等爲沐化勸息乞准銷案以息訟斷而沾憲德事」（吳密察上揭書第18冊，318～319頁）を參照。
- 23) 『淡新檔案』22302.44「遵依結狀（黃君祥爲伊具控黃阿愛違約橫僥一案經公親調處婉勸黃阿愛備銀二百三十元給伊而將原立合約取回伊願甘息訟）」（吳密察上揭書第18冊，319頁），『淡新檔案』22302.45「黃阿愛爲伊被黃君祥具控違約橫霸一案經公親調處婉勸伊備銀二百三十元給黃君祥而將原立合約取回伊願甘息訟」（同上，319～320頁）を參照。
- 24) 『淡新檔案』22609.1「周許氏爲欺寡圖霸變公肥私乞准飭拘訊斷以均苦樂事」（吳密察上揭書第23冊，115頁），『淡新檔案』22609.2「周許氏爲恨控逞刁乞准飭拘訊究事」（同上，115～116頁）を參照。
- 25) 『淡新檔案』22609.3「周許氏爲遵批查明呈催電奪事」（吳密察上揭書第23冊，116～117頁）を參照。
- 26) 『淡新檔案』22609.4「新竹縣正堂徐爲飭傳訊斷事」（吳密察上揭書第23冊，117～118頁）を參照。
- 27) 『淡新檔案』22609.5「監生周其昌爲背約誣貪叠索無厭乞恩嚴提訊究律辦事（中略）詎兄螟子春草弄蕩花銷，背越父約（後略）」（吳密察上揭書第23冊，118～119頁），『淡新檔案』22609.6「〔合約〕（周玉行等三兄弟備出銀一百八十元付與周冬福改圖別業竝承坐茶泰號一切債貨物件）」（同上，119～120頁），『淡新檔案』22609.7「〔實收幫助銀字〕周玉樹等出銀五百五十元付給長嫂周許氏收執以爲幫助茶源號竝作爲養贍之資」（同上，120～121頁）を參照。
- 28) 竹塹に駐在する臺灣北路協右營であろう。前掲『重修臺灣省通志』卷5，21～23頁，また

「官は官を庇う」か

と訴えた²⁹⁾。

翌光緒9(1883)年1月25日、周許氏は新竹縣に裁判を催促した³⁰⁾。2月4日、知縣は、差役に呼び出しを命じた³¹⁾。2月13日、周其昌は新竹縣に訴えた³²⁾。2月16日、差役は周其昌・周國香・周許氏・周春草を呼び出した³³⁾。2月18日、周其昌は再び新竹縣に訴狀を提出したが、知縣は「裁判を待て」と命じた³⁴⁾。2月25日、周許氏は「周其昌らが提出した證據は偽造だ」と訴え、周冬福が經營する「茶泰號」の所有する土地の明細書を證據として提出した³⁵⁾。同日、知縣は當事者を審問して「親族の陳謙甫らを呼び出せ」と命じた³⁶⁾。翌2月26日、差役に召喚狀を下した³⁷⁾。

3月3日、周許氏は、再び新竹縣に訴えた³⁸⁾。一方、差役は陳謙甫らを呼び出した。3月10日、知縣は當事者と證人を審問し、「周其昌らは再び100元を出せ。そのうち80元を周許氏に拂え。20元を明志書院³⁹⁾に拂え」と言い渡した⁴⁰⁾。その後、當事者も證人も

-
- 『淡新檔案』22609.23「[口供](周許氏等六人之口供)(中略)據陳謙甫供：年四十三歲，原籍南安縣，住北門口。同治十三年間，周許氏同子周春草赴北右營主黃協臺控告周五娘兄弟霸抗家業，蒙營主俯念親房，著在外理處(後略)」(吳密察上揭書第23冊，132～134頁)を參照。
- 29)『淡新檔案』22609.8「生員周國香爲疊處復翻差擾難安乞恩准著原處公親族人照約理論事」(吳密察上揭書第23冊，121～122頁)を參照。
- 30)『淡新檔案』22609.9「周許氏爲霸吞疊露催乞迅斷事」(吳密察上揭書第23冊，122～123頁)を參照。
- 31)『淡新檔案』22609.10「新竹縣正堂徐爲催傳訊斷事」(吳密察上揭書第23冊，123頁)を參照。
- 32)『淡新檔案』22609.11「監生周其昌爲不憑字據混控無休乞恩傳齊人證提訊嚴究事」(吳密察上揭書第23冊，124～125頁)を參照。
- 33)『淡新檔案』22609.12「站堂役倪逢稟爲違傳到案稟訊事」(吳密察上揭書第23冊，125頁)を參照。
- 34)『淡新檔案』22609.13「監生周其昌爲不事生業違背先盟乞恩電察嚴提訊究事」(吳密察上揭書第23冊，125～126頁)を參照。
- 35)『淡新檔案』22609.14「周許氏爲忘恩負義捏抵霸吞乞恩核訊以分涇渭事」(吳密察上揭書第23冊，126～127頁)，『淡新檔案』22609.15「[甘結](周許氏等甘結得伊與夫弟周玉樹等竝無立有分家出店與實收幫助銀等字據)」(同上，127頁)，『淡新檔案』22609.16「[田業清單]茶泰號名下田業清單」(同上，127～128頁)を參照。
- 36)『淡新檔案』22609.17「[堂諭]諭令另傳公親陳謙甫等人到案再行覆訊」(吳密察上揭書第23冊，128～129頁)，『淡新檔案』22609.18「[口供](周許氏等四人之口供)」(同上，129～130頁)を參照。
- 37)『淡新檔案』22609.19「[單](新竹縣知縣徐錫祉單仰原差倪逢立傳公親陳謙甫等人到案以憑提同兩造覆訊定斷)」(吳密察上揭書第23冊，130頁)を參照。
- 38)『淡新檔案』22609.20「周許氏爲事有虛實理有定章乞提核察以分黑白事」(吳密察上揭書第23冊，130～131頁)を參照。
- 39)新竹縣に設けられた學校である。鄭鵬雲・曾逢辰『新竹縣志初稿』卷3「明志書院」(93頁)を參照。
- 40)『淡新檔案』22609.22「堂諭(斷令周其昌再備銀一百元交周許氏以爲養贍之資如再翻控定即

「遵依結狀」を提出した⁴¹⁾。3月13日、周許氏は80元を受け取った⁴²⁾。

4月28日、周許氏は臺北府に上控した。いったん「不准」とされたが、6月28日に提出した門丁の不正行為を理由とした上控は「准」を受け、知府は事案を縣に下げ渡した⁴³⁾。

7月3日、周許氏は新竹縣に訴狀を提出したが、「不准」とされた⁴⁴⁾。

7月13日、周許氏は再び縣に訴えた。「不准」とされたのみならず、新任の知縣（周志侃）は周許氏の訴えに怒り、「道と府に報告し、事案を登録するように要請する。もし周許氏が上控したら、彼女を縣に護送し裁判することを要請する」と決定した⁴⁵⁾。7月20日、新竹縣は臺灣道と臺北府に「詳請立案」の報告書を提出した⁴⁶⁾。

8月29日、臺北府は新竹縣に返事を送り、臺灣道も臺北府も縣の要請を認めた⁴⁷⁾。こうして9月18日、臺北府は、府に上控した周春草を縣に護送した。10月19日、知縣は周春草を審問した⁴⁹⁾。一方、周許氏は臺灣道に上控した⁵⁰⁾。

照例懲辦」(後略)」(吳密察上揭書第23冊, 131~132頁), 『淡新檔案』22609.23「[口供] (周許氏等六人之口供)」(同上, 132~134頁)を参照。

- 41) 『淡新檔案』22609.24「[遵依結狀] (周許氏等爲伊具控周五娘等欺霸一案斷令周其昌等再備銀一百元交伊以爲養贍之資伊甘願遵斷)」(吳密察上揭書第23冊, 134頁), 『淡新檔案』22609.25「[遵依結狀] (監生周其昌爲伊被周許氏具控欺霸一案斷令伊等再備銀一百元交伊以爲養贍之資伊甘願遵斷)」(同上, 134~135頁), 『淡新檔案』22609.26「[遵依結狀] (生員周國香爲周許氏具控周五娘等欺霸一案斷令周其昌等再備銀一百元交周許氏以爲養贍之資伊甘願遵斷)」(同上, 135頁), 『淡新檔案』22609.27「[遵依結狀] (陳謙甫郭天賜爲周許氏具控周五娘等欺霸一案斷令周其昌等再備銀一百元交周許氏以爲養贍之資伊甘願遵斷)」(同上, 135~136頁)を参照。
- 42) 『淡新檔案』22609.30「[領銀狀] (周許氏具狀領得佛銀八十元)」(吳密察上揭書第23冊, 136~137頁)を参照。
- 43) 『淡新檔案』22609.32「周許氏爲霸吞屈斷情慘難堪不已乞提訊究非敢圖事」(吳密察上揭書第23冊, 137~138頁)を参照。
- 44) 『淡新檔案』22609.33「周許氏爲不憑圖例難准偏斷吁憲恩准拘集明斷事」(吳密察上揭書第23冊, 138~139頁)を参照。
- 45) 『淡新檔案』22609.34「周許氏爲違例立圖欺死瞞生乞拘集公斷事」(吳密察上揭書第23冊, 139~141頁)を参照。
- 46) 『淡新檔案』22609.35「新竹縣爲詳請立案事」(吳密察上揭書第23冊, 141~142頁)を参照。
- 47) 『淡新檔案』22609.37「臺北府正堂陳爲錄批行知事」(吳密察上揭書第23冊, 143頁)を参照。
- 48) 『淡新檔案』22609.38「臺北府正堂陳爲札飭事」(吳密察上揭書第23冊, 143~145頁)を参照。
- 49) 『淡新檔案』22609.40「[提訊名單] (周春草一名)」(吳密察上揭書第23冊, 145頁), また『淡新檔案』22609.41「[口供] 周春草之口供」(同上, 145~146頁)を参照。
- 50) 前掲『淡新檔案』22609.42「呈 (周許氏爲周玉樹等圖謀久霸抗不分析布賂門丁包案致使前後任新竹縣憲屈斷呈請福建分巡臺澎兵備道劉璈恩准提案集訊斷分家產事)」を参照。

「官は官を庇う」か

10月30日、臺灣道は周許氏の上控を新竹縣に下げ渡した⁵¹⁾。11月2日、知縣は差役に關係者の召喚を命じた⁵²⁾。11月9日、周其昌が縣に訴えた⁵³⁾。11月21日、差役が關係者を呼び出したが、知縣の交代のため、裁判は行われなかった⁵⁴⁾。

12月3日、周許氏は再び新竹縣に訴えた。新任の知縣（朱承烈）は差役に呼び出しを命じた⁵⁶⁾。12月13日、周其昌は新竹縣に訴狀を提出した⁵⁷⁾。12月15日、周其昌は縣に「書類審査をしてほしい」と訴えたが、差役は當事者と證人を呼び出し、周其昌の要請は知縣に卻下された⁵⁸⁾。

12月17日、知縣は當事者と證人を審問し、「訟師の名前を供述するまで周春草を勾留するように」と言い渡した⁵⁹⁾。

翌光緒10(1884)年1月28日、周許氏は再び新竹縣に訴えた。知縣は、「訟棍を調べろ。抱告を呼び出せ。一緒に罰しろ」と命じた⁶⁰⁾。2月6日、周氏一族の周藩らが縣に訴えたが、その訴狀は知縣に卻下された⁶¹⁾。2月12日、周其昌は縣に「訴訟を教唆した者

51) 『淡新檔案』22609.43「〔批示〕（福建分巡臺澎兵備道劉璈批仰新竹縣查案集訊秉公剖斷詳請核奪）」（吳密察上揭書第23冊，147頁）を参照。

52) 『淡新檔案』22609.44「新竹縣正堂周爲特飭傳訊事」（吳密察上揭書第23冊，147～148頁）を参照。

53) 『淡新檔案』22609.45「監生周其昌爲疊控疊翻掩案瞞准乞恩嚴提究訟以徹刁頑以正律法事」（吳密察上揭書第23冊，148～149頁）を参照。

54) 『淡新檔案』22609.46「站堂役倪逢稟爲遵飭傳到稟訊事」（吳密察上揭書第23冊，149頁）を参照。

55) 『淡新檔案』22609.47「周許氏爲慘情已極無分奚甘乞迅集訊斷分以息冤慘事」（吳密察上揭書第23冊，149～150頁）を参照。

56) 『淡新檔案』22609.48「新竹縣正堂朱爲飭催傳訊事」（吳密察上揭書第23冊，150～151頁）を参照。

57) 『淡新檔案』22609.49「監生周其昌爲逞刁聽棍藐斷欺官乞恩嚴提究訟事」（吳密察上揭書第23冊，151～152頁）を参照。

58) 『淡新檔案』22609.53「監生周其昌爲一日訟纍即一日失業懇堂閱全案以便究訟事（中略）正堂朱批：已訊有堂諭」（吳密察上揭書第23冊，154～155頁），『淡新檔案』22609.50「皂總站堂役倪逢稟爲遵飭傳到稟訊事」（吳密察上揭書第23冊，152～153頁）を参照。なお、周其昌の要請は22609.51や22609.52で述べられている縣の裁判より前に提出したのであろう。ただ、知縣の批語は、その裁判の後に書かれたものである。

59) 『淡新檔案』22609.51「〔堂諭〕（將周春草答責並管押至供出訟師姓名方准開釋）」（吳密察上揭書第23冊，153頁），また『淡新檔案』22609.52「〔口供〕（陳謙甫等五人之口供）」（同上，153～154頁）を参照。

60) 『淡新檔案』22609.55「〔呈狀〕周許氏爲合約與幫助字乃周玉樹爲圖霸所造並非分家之證呈請新竹縣知縣朱承烈細核情由恩准提案集訊斷分家產」（吳密察上揭書第23冊，156～157頁）を参照。

61) 『淡新檔案』22609.56「族親周藩等爲坐視不忍切實聲陳僉乞澈訊明判斷結以息訟端事」（吳密察上揭書第23冊，157～158頁）を参照。

と周春草を處罰してほしい」と訴えた⁶²⁾。2月25日、差役は知縣に「周春草が病氣にかかった」と報告した⁶³⁾。2月28日、周許氏は縣に周春草を釋放することを求めた⁶⁴⁾。同日、知縣は周春草を審問し、引き続き勾留すると決定した⁶⁵⁾。

3月26日、新竹縣は周春草を釋放した⁶⁶⁾。

光緒11(1885)年9月～11月、周許氏は臺北府と巡撫に繰り返し上控した⁶⁷⁾。また、臺灣を巡視している欽差のところに訴えた。10月27日、欽差の指示が按察使司を通じて臺北府に届いた。11月12日、知府は事案を新竹縣に下げ渡して裁判させることにした⁶⁸⁾。11月26日、知縣の方祖蔭は差役に當事者を呼び出すことを命じた⁶⁹⁾。

12月3日、周許氏は縣に訴狀を提出した⁷⁰⁾。12月10日、周其昌は縣に訴えた⁷¹⁾。同日、差役は周許氏らと呼ばし出した⁷²⁾。12月11日、方祖蔭は「親族に調處を頼む。周其昌は周許氏に若干の金を支拂え」と言い渡した⁷³⁾。

調處を引き受ける親族がいなかったため、周春草は縣に勾留された⁷⁴⁾。翌光緒12

62) 『淡新檔案』22609.57「監生周其昌爲究訟未究枝節叢生乞恩迅照案提抱跟究以杜訟根事」(吳密察上揭書第23冊, 158～159頁)を参照。

63) 『淡新檔案』22609.58「站堂役倪逢稟爲管犯染病稟報電奪事」(吳密察上揭書第23冊, 159頁)を参照。

64) 『淡新檔案』22609.59「周許氏爲久押絕食哀乞釋放以救家口而全老命事」(吳密察上揭書第23冊, 159～160頁)を参照。

65) 『淡新檔案』22609.60「[[堂諭](仍將周春草管押)」(吳密察上揭書第23冊, 160頁), 『淡新檔案』22609.61「[[口供](周春草之口供)」(同上, 160～161頁)を参照。

66) 『淡新檔案』22609.62「[[堂諭](將周春草釋放)」(吳密察上揭書第23冊, 161頁)を参照。

67) 『淡新檔案』22609.69「[[批語]福建臺灣巡撫劉銘傳與臺北府知府劉勳等關於周許氏具告周玉樹霸吞公產一案之批語」(吳密察上揭書第23冊, 165～166頁)を参照。

68) 『淡新檔案』22609.64「臺北府正堂劉爲札飭事」(吳密察上揭書第23冊, 161～162頁), 『淡新檔案』22609.65「周許氏爲強霸家業恃財賂壓泣乞親提縣卷拘集質訊究斷均分事」(同上, 162～163頁)を参照。

69) 『淡新檔案』22609.66「新竹縣正堂方爲特飭傳訊事」(吳密察上揭書第23冊, 163頁)を参照。

70) 『淡新檔案』22609.67「周許氏爲冤沉數載無處可伸泣乞提集究斷剖分事」(吳密察上揭書第23冊, 163～164頁)を参照。

71) 『淡新檔案』22609.68「監生周其昌爲疊結疊翻案無奈何乞恩嚴提徹究以杜訟根事」(吳密察上揭書第23冊, 164～165頁)を参照。

72) 『淡新檔案』22609.70「皂總站堂役倪逢稟爲遵飭傳到稟請提訊事」(吳密察上揭書第23冊, 166頁)を参照。

73) 『淡新檔案』22609.71「[[堂諭](仍著原處公親再酌勸若干爲周許氏贍養之資)」(吳密察上揭書第23冊, 166～167頁), 『淡新檔案』22609.72「[[口供](周許氏等三人之口供)」(同上, 167頁)を参照。

74) 『淡新檔案』22609.73「皂總頭役倪逢稟爲疊結疊翻公親無人稟請電奪事」(吳密察上揭書第23冊, 167～168頁), 『淡新檔案』22609.74「[[堂諭](將周春草管押另候詳辦)」(同上, 168頁)を参照。

「官は官を庇う」か

(1886) 年 1 月 23 日, その妻の周楊氏は新竹縣に周春草を釋放することを求め, 周春草は釋放された⁷⁵⁾。2 月 2 日, 周其昌は, 「周許氏が周春草に教唆され, 店に行き喧嘩した」と縣に訴えた。方祖蔭は周其昌の訴えを卻下した⁷⁶⁾。

2 月 12 日, 新竹縣は臺北府に「副詳」を提出した⁷⁷⁾。2 月 15 日, 新竹縣は按察使・分巡道・臺北府に通詳を提出し, 事案を終えることを求めた⁷⁸⁾。一方で, 3 月 3 日, 周許氏は再び新竹縣に「家産を分けてほしい」と訴えたが, 知縣に卻下された⁷⁹⁾。3 月 27 日, 臺北府は新竹縣の通詳を認めた⁸⁰⁾。

光緒 19 (1893) 年 2 月 3 日にかけて, 周許氏と周春草はたびたび新竹縣に訴えた⁸¹⁾。

1-2. 小括

清代後期には, 發審局に事案を下げ渡して裁判させたほか, 省レベルの官憲が地方に駐在する分守分巡道に上控を下げ渡すことがよく見られた。そして, 分守分巡道が自ら上控を裁判するか原審官憲を含めた下僚に下げ渡して裁判させることがよく見られた⁸²⁾。

75) 『淡新檔案』22609.76「周楊氏爲老姑病篤夫押無依懇恩憐念暫行開釋以侍湯藥而延殘生事」(吳密察上揭書第 23 冊, 169~170 頁)を参照。

76) 『淡新檔案』22609.77「監生周其昌爲疊結疊翻案無奈何乞恩嚴提徹究以杜訟根事」(吳密察上揭書第 23 冊, 170 頁)を参照。

77) 『淡新檔案』22609.78「新竹縣爲違札錄案詳銷事」(吳密察上揭書第 23 冊, 170~173 頁)を参照。

78) 『淡新檔案』22609.79「新竹縣爲違札錄案詳銷事」(吳密察上揭書第 23 冊, 174 頁), また『淡新檔案』22609.81「新竹縣爲違札錄案詳銷事」(同上, 175~176 頁)を参照。

79) 『淡新檔案』22609.80「周許氏爲均平貧富益寡褒多懇恩提釋公斷事」(吳密察上揭書第 23 冊, 174~175 頁)を参照。

80) 『淡新檔案』22609.83「臺北府正堂雷爲錄批行知事」(吳密察上揭書第 23 冊, 176 頁)を参照。

81) 『淡新檔案』22609.88「周許氏爲飢苦難度懇求被毆泣迅填驗秉公究斷事」(光緒 12 年 7 月 3 日。吳密察上揭書第 23 冊, 178~179 頁), 『淡新檔案』22609.93「周許氏爲怒較抗霸慘屈莫伸乞恩飭差提訊察辦斷分以免久霸事」(光緒 16 年 1 月 28 日。同上, 181 頁), 『淡新檔案』22609.95「周許氏爲怒較抗霸慘屈無伸哀乞飭提訊斷究分以免抗霸事」(光緒 16 年 2 月 13 日。同上, 182~183 頁), 『淡新檔案』22609.96「周許氏爲慘屈未伸不得不瀆事」(光緒 16 年 閏 2 月 8 日。同上, 183 頁), 『淡新檔案』22609.97「周許氏爲金靈廢馳冤慘莫伸懇乞嚴提訊究吊據分還而伸冤屈事」(光緒 16 年 4 月 6 日。同上, 184 頁), 『淡新檔案』22609.98「周許氏爲冤抑無伸不已再瀆乞恩飭提訊究公斷事」(光緒 16 年 8 月 18 日。同上, 184~185 頁), 『淡新檔案』22609.99「周春草爲虎叔抗霸屈冤無伸乞准飭差拘傳訊斷以免強霸事」(光緒 17 年 9 月 3 日。同上, 185~186 頁), 『淡新檔案』22609.99「周許氏爲抗霸有據撫養無恩懇准提訊察斷而伸冤屈事」(光緒 19 年 2 月 3 日。同上, 186~187 頁)を参照。

82) 『淡新檔案』には分巡道が自ら裁判を行った例が殆ど見られないが, 苟德儀によれば『巴縣檔案』には残っている。苟德儀『川東道臺與地方政治』, 172~173 頁を参照。一方, 『淡新檔案』のほか, 『南部檔案』には分巡道が上控を下僚に下げ渡して裁判させた事案が散見す。

事例1では、分巡道が巡撫の指示に基づき、府を飛び越えて上控を原審官憲の淡水廳に下げ渡している⁸³⁾。ただ、上控事案は原審官憲だけではなく、原審官の陳星聚に下げ渡して裁判させた。刑律斷獄「辯明冤枉」條に基づけば、裁判が滞っていることを理由に上控した案件に關しては、原審官に下げ渡して裁判させるべきではなく、原審官と一緒に上控を裁判してもいけない⁸⁴⁾。福建巡撫と臺灣道の處理は明らかに清律に違反している。その背景としては、當時の淡水・新竹地方の管轄權が非常に曖昧であったために、どの府に下げ渡しても適切ではないこと⁸⁵⁾、また當時の臺灣道の職務の中心は軍事であり⁸⁶⁾裁判にかかわる餘裕がなかったこと、という2點が挙げられる。しかし、巡撫（丁日

る。『南部檔案』Q1-12-466-8-1（「欽加鹽運使銜■■■■加伍級候補道特授保寧府正堂加七級紀錄七次記大功十次唐，爲違批札飭事。案奉川北道張批，據該縣民李進昌，文生李成林，民李含昌，李錫昌，抱告李應昌，以私爭霸葬等情上控李本源等一案（後略）」）を參照。また光緒年間に刑部尙書だった薛允升の批判から，類似する對處が當時よく見られたことが窺われる。薛允升『讀例存疑』卷49，「辯明冤枉（中略）從前此等案件，頗爲認真，條奏者，亦復不少，近則絕無人議及，而定例亦視爲具文矣」を參照。

83) 地方檔案には，上級官僚機構が上控を直ちに原審官憲に下げ渡して裁判させた事例が見られるが，府を通じて原審官憲に下げ渡した，つまり官僚機構の順に基づいて上から下へ下げ渡したことがよく見られた。事例2に見える周許氏の欽差宛の上控も，『南部檔案』Q1-12-466-8-1に見える李進昌らの川東道宛の上控も，一例である。言い換えれば，事例1に見える處理には，清律に違反していなくても多少に違和感がある。前掲『淡新檔案』22609.64「臺北府正堂劉爲札飭事」，前掲『南部檔案』Q1-12-466-8-1（「欽加鹽運使銜■■■■加伍級候補道特授保寧府正堂加七級紀錄七次記大功十次唐，爲違批札飭事（後略）」）を參照。

84) 清律・斷獄・辯明冤枉「各省督撫除事關重大案疑難應行提審要件」を參照。

85) 事例1が起きた時期は，まさに清朝が臺灣北部に臺北府と新竹縣を増設して淡水廳を廢止したときである。淡水廳の廢止時點については，光緒1（1875）年（戴炎輝「清代臺灣における訴訟手續きについて——淡新檔案を資料として」）と光緒4（1878）年（鄭鵬雲・曾逢辰『新竹縣志初稿』卷1「光緒四年增設臺北府，淡新分治」，1頁）と光緒5（1879）年（『新竹縣制度考』，「廢淡廳，置臺北府，系光緒五年」，臺北：臺灣銀行，1961年，1頁）という3つの見解が存在する。しかし，『淡新檔案』22505番文書から，淡水廳が光緒4年2月の末にかけて存在したことがわかる。22505.1「呂標呂春爲平毀占葬散尋無踪乞迅飭差押指還事（中略）候牒交新任臺北府核辦」（光緒4年2月29日），また22505.2「呂標呂春爲蒙批未辦乞迅飭差還還事」（光緒4年3月8日に臺北府に宛てた）を參照。また『淡新檔案』21101番文書から，光緒3（1877）年6月，淡水廳と臺北府とが併存していたことがわかる。21101「〔案由〕淡水分府陳接臺北府向奉撫憲營務處何來函行營有林孝廉名友松前往南路查無音信臺北有無其人速即查覆由」を參照。そのため，淡水廳を廢止した後（光緒5年）に新竹縣を設けたにもかかわらず，臺北府の下僚である新竹縣が臺灣府の下僚である淡水廳と同じ地域（＝竹塹，香山，新埔，大崙，中港，苗栗，吞霄，大甲の八堡。陳培桂『淡水廳志』，2～3頁，51頁，また『新竹縣採訪冊』，2～3頁を參照）を管轄したため，光緒3（1877）年以降光緒4（1878）年3月以前，臺北府と臺灣府はともに淡水・新竹地方を管轄していたことがわかる。ゆえに，臺灣道は案件を臺北府にも臺灣府にも下げ渡せず，淡水廳に裁判を命じたのであろう。

86) 1874年に起きた牡丹社事件から，1885年の清佛戰爭にかけて，清朝の朝廷は臺灣で一連の

「官は官を庇う」か

昌)も分巡道(劉璈)も、その処理のために處分を受けることはなかった。言い換えれば、州縣自理の案の場合は、地方官憲が清律に違反し州縣自理の上控事案を原審官に下げ渡すことがあっても、追及があまり嚴格ではなかったであろう。

清代においては、命盜案件の処理のための公文書を送り連絡・交渉をすることのほか⁸⁷⁾、地方官憲が上控をめぐって詳・稟など公文書を送ってやり取りをした事例もよく見られた。事例1からは、自ら裁判する権限を持っているが、臺灣道が上司と下僚を連絡する中間機構であることがわかる。また事例2からは、裁判に当たる官憲は、上控を下げ渡した各上位官憲の中で最も上にいる者をはじめ、各上司に裁判の結果を報告して追認を求めるべきことが窺われる。その報告書は、通詳というものである⁸⁸⁾。

ただ、裁判に当たる官憲の直接の上司(事例2では臺北府である)を除き、通詳を受けた上位官憲は返事をしないことがよく見られた。上位官憲が裁判の報告を確認した後に、詳を原審の官憲に下し(「原詳の衙門に批發して遵照させて奉行させる」)書冊を上位官憲に保存する(「備案」)べきであることから⁸⁹⁾、上位官憲が報告を求める背景は裁判を確認するためであったことがわかる。そのため、より上位の官憲が下げ渡した州縣自理の案の通詳を受け、裁判の結果を確認して異議を唱えず、裁判に当たる官憲の直接の上司の追認があるために自分の意見を伝えなくても構わないと考えていたのであろう。

一方で、上位官憲が詳の提出を監督する例がよく見られたが⁹⁰⁾、上控を裁判した後に

軍事行動を行った。それについては、『重修臺灣省通志』巻5、275～277頁、280～283頁を参照。

87) 命盜案件の報告制度について、鈴木秀光「詳結——清代中期における軽度命盜案件處理」、同「清代嘉慶・道光期における盜案の裁判」を参照。

88) 清代における通詳・通稟という報告制度について、滋賀秀三は「州縣から、ただちに督撫臬司道府等、省内の各上司に一應の報告を出すことが義務づけられていた」と指摘しているが、事例2から、新竹縣は總督と巡撫に報告せず、按察使司(周許氏の欽差に提出した上控を下げ渡した者)以下の各上司に報告したことがわかる。前掲滋賀秀三『清代中國の法と裁判』、29～32頁を参照。

89) 臺灣銀行經濟研究室編『福建省例』、「詳文只錄看語呈控、批審案件仍照書冊全錄」(第1冊、3～4頁)を参照。

90) 『淡新檔案』22418(「[案由] 据竹南二保芎蕉灣莊民劉桂春呈頑佃劉阿傳抗租霸業呈請提訊究追由」, 光緒6～7年)からは、新竹縣が巡撫・按察使司・臺灣道・臺北府宛てに通詳を提出し臺北府に追認を貰ったが、その後に臺北府は再び新竹縣に詳を提出することを求めたことがわかる。『淡新檔案』22418.67「臺北府新竹縣爲錄案詳覆事」(光緒7年11月27日)、22418.69「[副詳批回] (臺北府知府陳星聚批示新竹縣知縣徐錫祉仍候巡撫岑毓英批示)」(光緒7年12月2日)、『淡新檔案』22418.76「臺北府正堂陳爲傳飭事」(光緒8年2月8日)、『淡新檔案』22418.77「臺北府正堂陳爲札飭事。札新竹縣。欽加三品銜臺北府正堂加一級隨帶加八級紀錄四次陳爲札飭事」(光緒8年5月23日)、『淡新檔案』22418.78「臺北府正堂陳爲札飭事」(光緒8年6月5日)を参照。

詳を提出しない例もよく見られた。事例 2 からは、新竹縣は光緒 11 年 12 月 15 日付けの一通の通詳のみを提出し、光緒 9 年の周許氏が臺灣道に訴えた事案に関しては、縣が詳を提出しなかったことがわかる。その背景は不詳であるが、州縣自理の案の場合は、報告の義務があまり嚴格ではなかったのであろう。

裁判の結果報告のほか、地方官が詳・稟など報告書を提出して、上控を取り下げるように要請した例もよく見られた⁹¹⁾。

事例 2 からは、新竹縣が光緒 9 年 7 月 20 日付けの詳で事案を登録すること（「立案」）を求めたことがわかる。その趣旨は、知縣が自分の勤務成績に傷のつくことを防ぐという個人的な目的にあったかもしれないが⁹²⁾、情報を上司に傳達して訴訟を管制しようとしたことが窺われる。一方で、省レベルの官憲が詳・稟という事前的報告制度を「省例」に定める理由としては、地方で起きた重大な案件（「緊要事件」）の情報を入手して効率的に統治しようとしたことが挙げられる⁹³⁾。詳・稟など公文書を送ることによって、上控に関する情報が各官憲の間に傳達され、下僚は上司の指示に基づいて行動し、行動の結果を上司に報告し、上司の監督を受けた。官憲間の公的なやり取りは、実際には上控制度の一環である。

ただ、下僚は公的なやり取りによって上司の許可を受けていたが、上司は随時に許可を撤回することができた。事例 2 からは、臺灣道は新竹縣の詳を認めたが、その後、周許氏の上控を受理し事案登録の許可を撤回したことがわかる。その理由として、臺灣道は「訴えは疑わしいが、確認の必要がある」（「所呈是否屬實，仰新竹縣查案集訊，秉公剖斷，詳候核奪」⁹⁴⁾）ことを挙げている。

下僚の報告に基づいて当事者の訴状を読む前に卻下を決定したため、当事者が不満を覚えて再び上控することもよく見られた。事例 2 からは、周春草の上控が臺北府に卻下された後、周許氏が臺灣道に上控したことが窺われる。つまり、訴訟の蒸し返しなど上控によく見られる弊害の背景には、官憲間の公的なやり取りが裁判に影響したことがある。

公的なやり取りを除き、官僚が私的なやり取りによって上控について交渉することもよく見られた。それについては、次節で『稀見清知府文檔』に見える 2 事例を取り上げ

91) 英文『嶽寶公牘』初集，「整頓關務間有訟棍欲斂費上控稟」（25～26 頁）を参照。

92) 前掲滋賀秀三『清代中國の法と裁判』，30 頁を参照。

93) 前掲『福建省例』，「用詳用稟章程」（第 1 冊，2 頁）を参照。

94) 前掲『淡新檔案』22609.43「〔批示〕（福建分巡臺澎兵備道劉璈批仰新竹縣查案集訊秉公剖斷詳請核奪）」を参照。

「官は官を庇う」か

て、上控裁判に現われた私的なやり取りによる影響について考察する。

第二節 『稀見清知府文檔』に見る私的なやり取り

『稀見清知府文檔』は、中國國家圖書館に所蔵されている常恩⁹⁵⁾の文書を出版した書物である⁹⁶⁾。常恩が貴州省安順府と黎平府の知府だった（道光26年～咸豐1年）時に書いた判語・告示・書信が収録されており、上控に關する文書が多數含まれている。とりわけ、道光27（1847）年に起きた徵稅をめぐる案件と道光30（1850）年～咸豐1（1851）年に起きた差役の收賄をめぐる案件については、數多くの書信が残っている。本節では、この2事案を事例3・事例4として紹介する。

2-1. 事例紹介

事例3 鹽商が府の徵稅に不満を覺えて上控した案件⁹⁷⁾。

95) 「緡紳全書（道光二十七年夏）」、「（貴州）安順府，知府加一級。常恩，滿洲廂白旗人，生員，二十六年九月授」（『清代緡紳錄集成』第18冊，198頁）を參照。その書簡によると，常恩は戶部「農曹」の勤務を経て，道光26（1846）年の春，欽差（賽尙阿・周祖培）の隨員として江南を巡視し，北京に歸った後に安順府の知府に任命され，道光27（1847）年3月18日に安順に着任し，道光27（1847）年の年末からの1年間，黎平府の知府を代行し，道光29（1849）年3月，安順府に歸り，咸豐1（1851）年10月，母が亡くなったために離任した（「丁憂」）。『稀見清知府文檔』第1冊，「河南河北道長」（31～34頁），「稟河南撫鄂」（34～37頁），「致京師親友入黔到任一切情形」（70～72頁），「致楊星垣司馬」（301頁），「致京都各友」（305頁），『稀見清知府文檔』第3冊，「哀啓者」（1193～1194頁）を參照。また『清史稿』卷390「周祖培（中略）二十六年，偕尙書賽尙阿查勘江南江防善後事宜，校閱江蘇，安徽，江西營伍」（第38冊，11730頁）や「內閣大庫檔案。道光27年12月19日。吏部。移會稽察房貴州巡撫〔喬用遷〕奏黎平府等缺，查有安順府知府常恩等堪以調署」（中央研究院歷史語言研究所，<http://archive.ihp.sinica.edu.tw/mctkm2/index.html>）を參照。

96) 『稀見清知府文檔』以外，常恩の文書を出版した書物としては、『安順黎平府公牘』（『明清法制史料輯刊』第1編21～23冊，北京：國家圖書館出版社，2008年）がある。しかしながら，中國國家圖書館の檢索システム（<http://opac.nlc.gov.cn/>）によれば，常恩の文書は『道光二十六年至咸豐元年安順府及黎平府稟稿』という表題で綴じられており，「清代道光～咸豐年間の抄本である。代わりに表題をつけた」（「清道光咸豐間，抄本。書名代擬」）と説明されている。現在，原物を閲覽することができないために不詳であるが，恐らく常恩本人は表題をつけず，檢索システムも出版物も假表題で綴じているのであろう。その一方で，『稀見清知府文檔』と『安順黎平府公牘』には，文書の點數や卷の配列に少し異なる點がある。前者には1348點の文書（書簡1035點，判語239點，告示74點）が全14卷として収録されているが，後者では前者に収録されている「道光二十六年在京發黔省竝二十七年到安順任稟信稿」という1卷が抜けており，全13卷として1299點の文書（書簡986點，判語239點，告示74點）を収録している。文書の全貌を見るため，本稿は『稀見清知府文檔』に基づき檢討する。

97) 書簡の全文については，附錄1を參照。

道光 27 (1847) 年 4 月 14 日、安順府の駱家橋に設けられた税關の巡役が、鹽を輸送していた脚夫を捕まえた。4 月 20 日、その脚夫を雇っていた行商の楊三らは、鹽を取り戻すために駱家橋の税關に行き、税關の役人と口論した。税關の役人は安平縣の差役に頼み、楊三らを安順府に護送させた。知府の常恩が彼らを審問した。

楊三らは、「これまでの販賣分は貴陽で納税した。長寨・廣順などのところでも販賣したが、安順では販賣しなかった。脚夫は無知のため、密かに小路を通って行った。そして鎮甯州の松樹林で捕まえられ、安順府に護送された。鹽を取り戻すため、私たちは 20 日に税關に行った。慌てて歩いて行ったので、そこで袖を机や腰掛けにとられてころんだ。税關で騒動を起こしたことはない」と供述した。常恩は、「楊三らは勝手に不適切なことをし、脱税をした」と判断し、「掌責せよ、鹽を返せ」と言い渡した。

その後、楊三らに鹽を賣った貴陽府の札佐鹽場の鹽商たちが、「安順府の巡役は禁令⁹⁸⁾に違反し、鹽を奪い取った」(「違禁截奪」)と貴陽府に訴えた。5 月 2 日、貴陽府の公文が安順府に届いた。しかし、常恩は、貴陽府の知府たる周作楫(字は小湖⁹⁹⁾)に書信を送り、案件の経緯及び彼の意見(「原告の訴えは事実と矛盾する。その訴訟には正当な理由がなく、誣告である」)を説明し、被告を貴陽府に護送することに反対した¹⁰⁰⁾。その一方で、鹽商たちは布政使司に上控した。布政使は事案を發審局に下げ渡した。

貴陽府は再び安順府に被告の呼び出しを求めた¹⁰¹⁾。一方、貴築縣の知縣の曹興仁(字は子祥¹⁰²⁾)は、普定縣の知縣(崇氏、名は不詳、字は埜漁¹⁰³⁾)と安順府の經歷の黨思齋(字は見山¹⁰⁴⁾)に書信を送り、また原告の訴狀の副本を送った。

常恩は曹興仁に返信を送った。裁判の経緯を説明し、「原告の 3 回の訴えには、多くの矛盾点がある。明らかに誣告である。彼らは脱税をした」と主張した¹⁰⁵⁾。5 月 16 日、崇氏も曹興仁に返信を送り、常恩とほぼ同じように裁判の経緯を説明し、常恩の意見を傳えた(「私たちは貴陽府の返事を待っている。被告を省城に護送し裁判させるにせよ、官僚を派遣し

98) この訴えの典據は不詳であるが、徴税についての「例」であろう。

99) 『緡紳全書(道光二十七年夏)』(前掲『清代緡紳錄集成』第 18 冊, 196 頁)を参照。

100) 「致首府周」(『稀見清知府文檔』第 1 冊, 119~122 頁)を参照。

101) 不詳であるが、發審局は法律に定められた官僚機構ではなく、公文を出す権限がないため、發審局を管理する「首府」(この事案では貴陽府である)によって召喚狀を出したのであろう。

102) 『緡紳全書(道光二十七年夏)』(前掲『清代緡紳錄集成』第 18 冊, 196 頁)を参照。

103) 書簡中では「埜」を「野」・「墅」と書いていることが見られる。

104) 『緡紳全書(道光二十七年夏)』(前掲『清代緡紳錄集成』第 18 冊, 198 頁), 「覆清鎮縣吳」(前掲『稀見清知府文檔』第 1 冊, 114~115 頁), また「覆署安順府胡」(前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊, 1336~1337 頁)を参照。

105) 「致首縣曹」(前掲『稀見清知府文檔』第 1 冊, 119~122 頁)を参照。

「官は官を庇う」か

現場を調査することを上司に求めるにせよ、必ず真相を究明する。そうすれば奸商の密輸を防ぐことができる」¹⁰⁶⁾。

その一方で、常恩は清鎮縣の知縣（吳氏、名は不明、字は檢齋）に書信を送り、有利な判決を下すことや現場調査を求めた（「この事案はすでに局に下げ渡したため、（裁判は）閣下の意見だけで決まるのである。あなたは賢明なのであり、私より非常に優しい方であり、もちろん事情を考慮して互いに決裂させることはしないだろう。もし原告が横暴に自説に固執したり、あるいは彼らがお金を頼みとして悪事をしたりすれば、布政使に報告してほしい。賢明な官僚を派遣し、鹽を差し押さえた場所を調べ、住民の證言を聞くことを上司に求めてほしい。そこは一體どこの府に管轄されるのか（を調べるように）。境界が明らかになれば、辨論しなくても是非がわかる」¹⁰⁷⁾。

その後、常恩は再び吳氏に書信を送った。「周作楫も曹興仁も返事をしない。私は黨思齋を派遣し、現場を調べ證言を聞いた。彼は郷約と一緒に地圖を描き、報告書を提出した。そこは確かに鎮甯州の管轄地域である」と言った¹⁰⁸⁾。その一方で、彼は再び周作楫に書信を送った。「被告の熊大五らがいない。指名された巡役の廖永年は病氣にかかっている。彼が治癒したら貴方のところに護送する。以上のことは、すでに布政使に報告した」と言った¹⁰⁹⁾。

7月13日、常恩は、「分巡貴東兵備道」（以下、「貴東道」と呼ぶ）を代行している朱德璉（字は綬堂¹¹⁰⁾）から布政使の指示を聞いた。そこで、彼は再び周作楫に書信を送った。貴陽府の調査結果（「安順府の巡役が脚夫を捕まえた場所は、確かに鎮甯州の管轄地域である」）を聞いたと言い、裁判文書の移送に同意することを伝え、関係者の護送について説明した（「布政使は廖永年らを護送しなくても構わないと言ったそうだ。裁判の後、すぐに脚夫の王麻三らを釋放したため、現在は安平縣に呼び出しを命じている。彼らが出頭したら、貴方のところに護送する。行商の楊三は貴築縣の民であるので、呼び出すことができない。原告に出頭を命じる方が良くと思う」¹¹¹⁾。

この紛争がその後どのようなようになったのかは不詳であるが、常恩が道光28（1848）年1月6日に定番州の知州を「候補」している陳氏（名は不明、字は景溪）に送った書信からは、

106) 「普定縣崇致首縣曹一函」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、109～111頁）を参照。

107) 「致清鎮縣吳」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、112～114頁）を参照。

108) 前掲「覆清鎮縣吳」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、114～115頁）を参照。

109) 「致首府周」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、115～116頁）を参照。

110) 『縉紳全書（道光二十七年夏）』（前掲『清代縉紳錄集成』第18冊、198頁）、また「致署東道」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、118～119頁）を参照。

111) 「致貴陽府」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊、136～138頁）を参照。

裁判が安順府に有利な方向に進んでいたことがわかる¹¹²⁾。

事例4 土地紛争とその裁判のために差役が収賄したことをめぐる上控¹¹³⁾。

道光30年(1850)8月10日、常恩は永甯州の知州の陳氏¹¹⁴⁾に書信を送り、「永甯州の民である吳炳南が、大勢の人が農作物を奪い取ったこと(「■衆搶獲」)を府に訴えた。現場は府城に近いので、私は鎮壓を命じて差役を派遣した。その後、吳炳南は再び相手側¹¹⁵⁾が多くの人を率いて寨を包圍したこと(「統衆圍寨」)を府に訴えた。重大な事件になる恐れがある。州の差役を派遣して鎮壓せよ」と指示した¹¹⁶⁾。

その一方で、當事者の吳炳壽が土地紛争をめぐって巡撫に上控した。巡撫は、「安順府と永甯州と一緒に裁判せよ」と指示した。安順府は永甯州に「被告の靈阿酋らを府に護送せよ」と指示し、府の差役に看守を命じた。その後、靈阿酋は差役の収賄を理由として省レベルの官憲¹¹⁷⁾に上控した。

咸豐1年(1851)1月、正月の馳走に感謝するため、常恩は布政使に書信を送り、養馬寨で起きた事件について報告した¹¹⁸⁾。その一方で、彼は貴陽府の知府(王氏、名は不明、字は蓮浦)に書信を送り、「養馬寨の人々は、ただ人数が多いことを頼みとして利益を狙っている。訴訟を教唆した吳永壽と王英は逃げたが、私は各州縣に命じて厳しく捕まえさせる。また賞金もつけて、彼らを秘密に捕まえることを命じた。もし上司がこの件を聞いてきたら、私のために説明してほしい」と主張した¹¹⁹⁾。

112) 「附陳景溪信後數語」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、1243頁)、「致黔西州蔣綠汀、坐補定番州陳景溪、邛水縣丞后花農、臬監印桂香谷、松桃廳李南枝。同稿。賀年並敘到任。與前同日發」(『稀見清知府文檔』第3冊、1242～1243頁)を参照。「與前同日發」の「前」は、「致安順提臺各營員道謝並賀年禧。正月初六日發、外封填腊月廿日(後略)」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、1237～1238頁を参照)である。

113) 書簡の全文について、附録2を参照。

114) 不詳であるが、陳氏の「字」から、事例3に登場した定番州の知州であるのがわかる。

115) 不詳であるが、靈阿酋らであろう。

116) 「致永甯州陳」(前掲『稀見清知府文檔』第2冊、717頁)を参照。

117) 不詳であるが、常恩が布政使に報告を出したことから、靈阿酋は布政使司に上控したのであろう。

118) 「附藩臺稟」(道光30年1月26日、前掲『稀見清知府文檔』第3冊、883～884頁)を参照。この書信は目録では「致謝首府王」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、884頁)の附録として書かれているが、実は「謝撫藩臺留飯稟」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、883頁)の後に綴じられている。

119) 「附首府信後」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、884頁)、また「養馬寨之案、現在主唆之吳永壽王英等經■匿、養馬寨內不過倚衆冀圖分肥而已、並無他故。除飭及各該管州縣嚴拏外、仰自行懸賞購線密緝、務期■獲懲辦、以儆刁頑。知閣厲念」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、882頁)を参照。前者に見える「首府の信」は「致謝首府王」(前掲『稀見清知府文檔』第3冊、882頁)を参照。

「官は官を庇う」か

その後、布政使と按察使は、関係者を呼び出すために官僚を安順府に派遣した。2月24日、常恩は永甯州の知州に書信を送り、「永甯州に勾留している者を府に護送せよ」と指示した¹²⁰⁾。一方、彼は鎮甯州の知州（石氏、名は不明、字は竹生）に書信を送り、「鎮甯州の大山哨というところに養馬寨の名を借りた強盜が出没している。捕まえよ」と命じた¹²¹⁾。

3月2日、常恩は貴陽府の知府に書信を送り、「裁判文書や関係者を省城に護送した。被告の差役（陳及炳と唐高）も省城に赴いた」と傳えた¹²²⁾。3月5日、彼は再び書信を送り、唐高の世話をすることを求めた¹²³⁾。その後、安順府の差役は吳永壽を捕まえた。4月1日、常恩は貴陽府の知府に書信を送り、「吳永壽と彼に消息を知らせた者を捕まえた。彼らを捕まえた者は、唐高の同僚である。唐高は貴築縣に拘束されているそうだ。彼を釋放してもらえないか。そうすれば、彼に命じて靈阿酋の行方を調べさせることができる」と求めた¹²⁴⁾。

貴陽府の知府が返事をしたのか、またどのように返事をしたのかは不詳であるが、その後、常恩はまた數通の書信を彼に送った。呼び出しの進捗状況を説明し、裁判の進捗状況を聞き、差役の唐高の世話をすることを求めた¹²⁵⁾。一方、常恩は清鎮縣の知縣（王氏、名は不明、字は相壑）と貴東道の周作楫¹²⁶⁾宛てにも書信を送り、案件の内容に言及して請託した¹²⁷⁾。

その後、常恩は、數通の書信を貴陽府の知府に送った。差役の唐高は無辜なのだと主張し、「靈阿酋らが自ら省城に赴いたため、呼び出しができない」と説明し、裁判の進捗状況を聞き、「鎮甯州の知州が強盜事件を調べている。彼を免職したら、強盜を捕まえることに不利だ。もし上司に彼を免職する考えがあれば、以上のことを説明してほしい」

知府文檔』第3冊、884頁）である。後者は前者とほぼ同じ内容であるが、宛名と日付がなく、多くの修訂の痕跡があり、それを収録している「咸豐元年安順府書稟稿上函」の目録に書かれておらず、実際には出さなかったのかもしれない。「仰」から、常恩が下僚の誰かに送るつもりのものであったのがわかる。

120) 「致永甯州陳」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、925頁）を参照。

121) 「致鎮甯州石」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、903頁）を参照。

122) 「致首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、935頁）を参照。

123) 「復首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、939～940頁）を参照。

124) 「致首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、967頁）を参照。

125) 「復首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、978頁）、「致首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、979～980頁）、「復首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、981頁）を参照。

126) 『爵秩全覽（咸豐元年夏）』（前掲『清代縉紳錄集成』第20冊、159頁）を参照。

127) 「致清鎮縣王」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊、981頁）、「附東道稟後」（同上、1012頁）を参照。

と求めた¹²⁸⁾。

6 月、常恩は、ある人物（「梅村」¹²⁹⁾）から省レベル官憲の決定（＝彼の責任を問わず差役に軽い處罰を科すこと）を聞き、貴陽府の知府に感謝の書信を送った¹³⁰⁾。その一方で、安順府の名義で布政使に稟を提出した（「私の管轄地域の永甯州の民である吳炳壽らと苗民である靈阿酋らは、養馬寨の莊業をめぐる紛争を起こした。巡撫から指示を受け、私と永甯州と一緒に裁判した。永甯州に命じ、被告の靈阿酋、靈阿跳らを府に護送させた。保証を取って店に勾留し、裁判を待たせていた。府の差役の唐高に看守を命じた。その後、私は唐高が当事者の靈阿酋らから 30 兩ぐらいの銀を巻き上げたことを摘發した。すぐに呼び出して審問した。贓物を吐き出させ、靈阿酋らに返した。上司に報告しているときに、当事者たちが省城に行き上控した。現在、上司から『案件を省城に移送して裁判せよ』という指示を受けている。差役の唐高を省城に護送して、上司が官僚を派遣して裁判を受けさせるべきだ。そうすれば、誠に公務に便利だ。そのため、稟を提出して許可を求める」¹³¹⁾）。

その後、常恩は再び貴陽府の知府に書信を送り、自分を弾劾しないことに感謝した¹³²⁾。

2-2. 小括

常恩が安順に着任した直後に起きた事例 3 と離任の直前に起きた事例 4 は、彼の知府としての経歴の中では最初の不祥事と最後の不祥事と言える¹³³⁾。したがって、この 2 事案に関する書信が多数残っているであろう。事例 3・事例 4 からは、常恩と他の官僚との私的なやり取りが上控の裁判に影響したことが窺われる。

128) 「復首府」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1016 頁），「復首府」（同上，1019 頁），「致首府王」（同上，1039～1040 頁）を参照。

129) 管見の及ぶ限り、この人物は「致首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1073 頁）のみに登場する。確證はないが、常恩が他の官僚に對するように「兄」と呼ばずに、「梅村」と「字」だけで呼んでいることから、この人物は現任の官僚ではないのであろう。また、この人物は省の處斷がまだ言い渡されていなかったにもかかわらず處斷の内容を知っていたことから、裁判の關係者であろう。恐らくは裁判に當たる官僚の「幕友」、あるいは發審局で働いていた「幕友」である。

130) 「致首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1073 頁）を参照。この書簡を送った時間は不明であるが、その前に置かれている「復遵義府佛」（同上，1071～1072 頁）に「六月十二日」と書かかれていることから、同日かその後すぐに送ったものであろう。

131) 前掲「稟藩憲」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1087～1088 頁）を参照。

132) 「復首府王」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1088 頁）を参照。

133) 確證はないが、事例 3 は恐らく常恩が道光 27（1847）年末に黎平府に左遷された理由であらう。當時、地方官が上控されたために左遷されることがよくあった。一例を挙げれば、廣東廣寧縣の知縣だった杜鳳治は同治 6（1867）年の徵稅をめぐる上控の影響を受け、同省の四會縣に左遷された（邱捷「知縣與地方士紳的合作與衝突」を参照）。また、事例 4 からは、常恩が危うく弾劾されるところだったことがわかる。

「官は官を庇う」か

事例3と事例4に見る私的なやり取りには、主に3つの内容がある。まず、上控の情報伝達である。事例3からは、貴築縣知縣の曹興仁が上控の訴狀の副本を常恩に送り、常恩が貴陽府知府の周作楫に案件の顛末とその裁判の経緯を説明したことがわかる。また事例4では、常恩は永甯州知州に上控の起きたことを伝え、鎮壓を指示した。その背景としては、上控は裁判制度だけではなく、行政的な一面、つまり統治を維持するために作られた制度という一面もあることが挙げられる¹³⁴⁾。

次に、自身の主張である。事例3からは、常恩が貴陽府知府の周作楫に事案の経緯を説明した目的が「行商の楊三らは脱税し、鹽商の上控は誣告である」という主張を證明することだったのがわかる。また事例4では、常恩が咸豐1年1月に布政使に送った書信と貴陽府知府の王氏に送った書信の中で、「養馬寨では鬭争が起きたことがない。當事者は人數が多いことを頼みとして利益を狙い、また吳永壽と王英が訴訟を教唆したために上控が起きた」と主張し、「重要な案件ではない。訴訟を教唆した者を捕まえれば、紛争を終わらせることができる」と示唆したことが窺われる。

最後に、請託である¹³⁵⁾。事例3からは、常恩が裁判に当たる官僚の一人、清鎮縣知縣の吳氏に有利な處斷を求めたことがわかる。また事例4からは、常恩がしばしば貴陽府

134) 傳統中國で上控制度が作られた目的については、民衆の「冤抑」を聞くことであると言われている。楊一凡・劉篤才「中國古代函制度考略」を参照。しかし、清朝における上控制度は人民の勝手な訴訟行為を管制する法律を含んでおり、つまり統治制度の一面もある。清律では、「越訴」を禁止する規定（「訴訟・越訴」條の後半部分）のほか、清代の初期に制定された「棍徒例」は種々の内容を含むが、「聚衆聯謀斂錢構訟」・「捏告各衙門」などの訴訟を管制するための法律も含んでいる。清律・軍政・激變良民「直省刁民假地方公事，強行出頭，逼勒平民，約會抗糧，聚衆聯謀，斂錢構訟，及借事罷考罷市，或果有冤抑，不於上司控告，擅自聚衆至四五十人，尙無開堂塞署，並未毆官者，照光棍例，爲首擬斬立決，爲從擬絞監候。如開堂塞署，逞凶毆官，爲首斬決梟示。其同謀聚衆，轉相糾約，下手毆官者，擬斬立決。其餘從犯，俱擬絞監候。被脅同者，各杖一百（後略）」、また清律・賊盜・恐嚇取財「凡惡棍設法索詐官民，或張貼揭帖，或捏告各衙門，或勒寫借約，嚇詐取財，或因鬭毆，糾衆繫頸，謊言缺債，逼寫文卷，或因詐財未遂竟行毆斃，此等情罪重大，實在光棍，事發者不分曾否得財，爲首者斬立決，爲從者俱絞監候。其犯人家主父兄，各答五十。係官，交該部議處。如家主父兄首者，免罪。犯人仍照例治罪」を参照。地方官憲が上控制度によって訴訟を管制した實態についての考察は、別稿に譲りたい。

135) ただ、その請託が賄賂に關わるとは限らない。常恩の書信を見ると、彼が他の官僚に物を贈ることも請託することもよくあったが、それらの贈り物は殆ど自筆の對聯か任地のお土産であった。事例3と事例4に登場した人物の中では、ただ事例4に登場した清鎮縣の知縣の王氏のみ常恩から贈り物（灰麪や醬油）を受け取った。常恩は贈り物の理由を正月に馳走に預かったこととしており、また王氏が事例4の裁判にどれほど影響したのか不詳である。たとえ王氏が裁判に参加していたとしても、灰麪・醬油などは處斷に影響することができず賄賂というより、相手との友情を深めるための進物だった。「致謝安平清鎮二處。正月二十六日。承齋，相墅仁兄大人閣下，往來榮治，厚擾鄒香。感綢之忱，非言可喻。此諭云云。同前。附呈灰麪，醬油共一挑，尙祈晒存是幸」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊，885頁），また李坤「道光，咸豐時期貴州知府的官場交往——從『安順黎平府公牘』所見」を参照。

の知府に書信を送り、差役の無辜を主張して釋放を求めたことが窺われる。

原審官が私的なやり取りを行った目的は、裁判を自分が希望する方向に動かすことだった。事例3・事例4からは、常恩が私的なやり取りを行うと同時に、公的なやり取りを行っていたことが窺われる¹³⁶⁾。両方のやり取りを行う背景には、私信は公文より親密であり、詳細に主張を説明しつつ受取人に取り入るようにして、自分自身を支持させることができるという考えがある¹³⁷⁾。

事例3・事例4に登場した人物を考察すると、多数の書信の受取人が裁判に当たる官僚であるのがわかる。事例3・事例4からは、常恩が處斷の権限を持っている省レベルの官僚（例えば、事例4に見える布政使）にも審理を擔當している官僚（例えば、事例3に見える貴陽府知府と清鎮縣知縣、また事例4に見える貴陽府知府）にも書信を送ったことがわかる。一方、裁判に当たる官僚たちが原審官である常恩に返信したこともよく見られた。その目的は、後者を説得し被告の呼び出しに協力させること（事例3に見える布政使が貴東道を通じて指示を常恩に傳えたこと）や處斷の根據を作ること（事例4に見える報告書を改めて提出するように示唆したこと）だった。つまり、裁判に当たる官僚は、原審官と同じように考え、私的なやり取りをして上控裁判を自分が希望する方向に動かした。

ただ、私的なやり取りによって請託など不正行爲をして、處斷に影響することもよく

136) 前掲「致首府周（中略）除另備公函，竝具稟藩憲外（後略）」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊，115～116頁），前掲「致永甯州陳（中略）除一面備具公牘知照貴處外（後略）」（前掲『稀見清知府文檔』第3冊，925頁）を参照。

137) この考えについては、常恩が下僚に送った書信によく見られる。事例4からは、常恩が永甯州に上控の情報を傳え鎮壓を指示したことがわかる。また知府は上司から受け取った指示（下げ渡して裁判させた上控を速やかに終わらせること）について、下僚の州縣官全員に公文を送ったが、清鎮縣の知縣から返信を受け取ったために、相手を落ち着かせるために私信を送った。「通飭七屬速結上控各案」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊，129～131頁），また「覆清鎮吳。檢齋大兄大人閣下。頃展還雲，藉悉一切。所有各憲批發上控案件，各屬盡能如吾兄之急公，弟幸何如之。實以各廳州縣積壓之件太多，而府控各差弊延者不可枚舉，故不得已加函。且係統稿，竝非專為貴縣一處而言。其府控續詞必須親提之說，亦不過阻原告上控，而使各差聞風自惕之意。若果逐起親提，而△亦不勝其纍矣。茲讀來函，似覺閣下會心太遠，惟不肯以弟為妄言而一笑置之，足見偶事認真，非他可比。正不禁控案之一端耳，愈深欽佩。至弟雖到黔未久，而控案之積弊，早知竝不在官。實係差與刁民各居其半。是以前次加函，欲使若輩知非具文。或可從此斂跡。今祈吾兄將前函姑存其說，仍須借弟親提二字嚴飭差役。倘各差真無賄弊，即或提質子虛，而刁民之反坐不難矣。尚望鑒原弟之苦衷，毋以前函措詞不當之處為介介耳。是禱此覆，即請升安。統希心照不宣」（同上，139～141頁）を参照。なお、「覆清鎮吳」に見る常恩の議論（「すべての上控を取り上げるのは不可能だ」）について、李典蓉は、知府が清鎮縣の民衆の上控を受け取ったために私信で知縣に知らせ、さらに當事者を反坐させる手段を教えたと論じた（李典蓉上掲書，187～188頁を参照）が、文脈や時點から、この書簡は「通飭七屬速結上控各案」の後に送ったものであり、常恩の目的は下僚に支持を求め通飭のように執行させることであることが窺われる。

「官は官を庇う」か

見られた。事例4からは、私的なやり取りによって上司が下僚に改めて報告書を提出することを指示し事案を終わらせたことがわかる¹³⁸⁾。つまり、私的なやり取りを行った結果が不正行為及び不適切な處断だとは限らないが¹³⁹⁾、不正行為をして不適切な處断を言い渡す可能性はある。当事者がそれに不満を覚えて再び上控するのは言うまでもない。

第三節 官僚間交渉プロセスにおける中間機構と専門機構

ここまで見てきたように、地方官のやり取りは上控裁判に影響したと言える。とりわけ、中間機構である分守分巡道と専門機構である發審局による連絡・交渉がよく見られた。本節は、この2機構の役割について考察する。

3-1. 分守分巡道による監督と連絡

清朝における分守分巡道は、分守道と分巡道という2つの官職を含んでいる。

明代の中期から、分守・分巡・兵備・鹽法などさまざまな「道」を設け、裁判を含めた多くの権限を與えた¹⁴⁰⁾。清朝は、明代の制度を踏襲しつつ多くの「道」を合併し、分守道を布政使司の下に置き、分巡道を按察使司の下に置いた¹⁴¹⁾。裁判に関しては、分守分巡道は自ら裁判を行うことと下僚の裁判を監督することという2つの権限を持っていた。このうち前者に関しては、刑律斷獄「辯明冤枉」條で規定されている¹⁴²⁾。後者は更に必要的覆審制の覆審と州縣自理の案に對する監督とに分かれ、刑律斷獄「淹禁」條や「有司決囚等第」條、及び刑律訴訟「告狀不受理」條で規定されている¹⁴³⁾。

138) 類する例は當時よく見られた。例えば、光緒3年、廣東省香山縣の知縣の交代の時に、前任が多く「盜案」を残したことをめぐって、前任の知縣と後繼の知縣とで紛争が起きた。事案を終わらせるため、省レベルの官僚が「首縣」だった杜鳳治を通じて、新任の知縣に報告書を書き直すこと（「改詳」）を指示し、前任の知縣を追及しないようにして紛争を解決した。邱捷「同治、光緒年間廣東首縣的日常公務——從南海知縣日記所見」を参照。

139) 事例3では、貴陽府は常恩の主張どおりに脚夫を捕まえた場所を調べたが、それは處断のために必要な證據であり、不正行為とは言えない。

140) 小川尙『明代都察院體制の研究』（130～159頁）、また謝忠志『明代兵備道制度』（134～138頁）を参照。

141) 吳吉遠『清代地方政府司法職能研究』（184～202頁）を参照。本稿で扱う史料はすべて分巡道に關するものであるが、會典が「分守分巡道」と呼ぶため、本稿は「分守分巡道」と呼ぶ。『欽定大清會典』卷4、「總督巡撫分其治於布政司、於按察司、於分守分巡道（中略）分守分巡地方道、九十有二人、專管稅關者一人」（光緒25年重修本、6～8頁）を参照。

142) 前掲清律・斷獄・辯明冤枉「各省督撫除事關重大案疑難應行提審要件」を参照。

143) 清律・斷獄・淹禁「各直省府廳州縣、凡有監獄之責者、除照向例設立循環簿、填註每日出入監犯姓名、申送上司查閱外、並令與專管監獄之司獄、吏目、典史等官、各將監禁人犯、

清代後期において、分守分巡道は裁判を含めた多くの権限を持っていたが、どの仕事を重視するかは各分守分巡道によってそれぞれ異なっていた¹⁴⁴⁾。したがって、事例1・事例2のように上司が下げ渡しした上控を下僚に下げ渡して裁判させることがよく見られた。その一方で、分守分巡道が連絡・交渉をすることもよく見られた。

事例1・事例2からは、分守分巡道が詳を受け取り下僚の要請を認め處断を迫認し、省レベルの官憲の指示を下僚に傳えたことがよくあったことがわかる。また、事例3・事例4からは、分守分巡道が下僚に私信を送って省レベルの官僚の指示を傳達し、上司に請託を依頼する下僚の書信を受け取ったことがわかる。言い換えれば、官僚組織の中間に位置する分守分巡道は、実際には省レベルの官憲と府・州・縣・廳との連絡機構だった。

ただ、私的なやり取りはどこに配属されているかにかかわらない。その背景としては、官僚の交際関係が挙げられる。事例3・事例4からは、貴東道は安順府を管轄しないが、貴東道と安順府の知府とが上控をめぐる書信をしばしば往復させていたことが窺われる¹⁴⁵⁾。事例3の背景については不詳であるが、事例4の貴東道と安順府知府との書信往復の背景としては、貴東道の周作楫が貴陽府の知府だった時から安順府知府の常恩と交際していたことが挙げられる¹⁴⁶⁾。

3-2. 發審局による裁判と交渉

嘉慶年間以降、各省は次々に發審局を設け、京控など重要で複雑な案件を下げ渡して裁判させた¹⁴⁷⁾。發審局は省城を管轄する府（「首府」）に設けられた機構であり¹⁴⁸⁾、省レ

無論新收舊管，逐名開載，填註犯案事由，監禁年月，及現在作何審斷之處，造具清冊，按月申送該管守巡道（後略）」を参照。

144) 例えば、19世紀中葉から、外交（洋務）が分巡蘇松太兵備道（上海道）の重要な仕事になった。梁元生『上海道臺研究——轉變社會中之關係人物：1843～1890』，21頁を参照。

145) 『清史稿』卷75「安順府，衝，繁，難。舊隸貴西道」（9冊，2354頁）を参照

146) 「謝首府周小湖郵筵」（前掲『稀見清知府文檔』第1冊，43～45頁）を参照。

147) 發審局については、「督撫衙門ニハ裁判事務ノ爲メニ特ニ發審局ヲ設ケ省城ニ在ル知府及五六ノ候補官吏ヲ命シテ委員ト爲シ該委員ヲシテ豫メ審訊セシムルヲ常トスト云フ」（臨時臺灣舊慣調査會『清國行政法』5卷，77頁を参照）と知られているが、近年の研究によれば、嘉慶～道光年間、各省では發審局を設け、「督撫衙門」ではなく按察使司の下に置き、「首府」に管理させたという。前掲滋賀秀三『清代中國の法と裁判』（15頁），また李貴連・胡震「清代發審局研究」を参照。一方、アヘン戦争以降、臨時機構を設けたことがよく見られるが、李星沅によれば、その以前「讞局」を設ける省があった。李星沅『李星沅日記』，「（道光20年1月）十三日（2月15日）（中略）蘭溪令王庶熙心如，行大。見，山東人，捐班，甚精敏，舊在開封讞局，有能聲（後略）」（8頁）を参照。その背景としては、戦後の復興のためというより、嘉慶年に急増している京控案件を解決することが挙げられる。阿風「清代の京控——嘉慶朝を中心に」を参照。

148) 曾國藩「直隸清訟事宜十條（中略）第二條保定府發審局宜首先整頓」（葛士浚『皇朝經世

「官は官を庇う」か

ベルの官憲の再編によって按察使司か總督衙門の下に置かれることもよくあったが¹⁴⁹⁾、依然として「首府」の知府に管理させたこともよく見られた¹⁵⁰⁾。發審局に勤める官僚は殆ど候補官であり¹⁵¹⁾、發審局そのものは正式な官憲ではなく、ただ裁判のために設けられる臨時的機構である¹⁵²⁾。一方、發審局の官僚には裁判で重要な役割があるため、原審官が發審局の官僚と連絡を取ろうとしたことがよく見られた。事例3・事例4からは、常恩が發審局の官僚に多くの書簡を宛てたことがわかる¹⁵³⁾。前述したとおり、その目的は裁判に影響力を働かせることだった。

裁判に影響力を働かせるというと、不正行為を連想させる。そのため、發審局の不正行為についての批判がよく見られる¹⁵⁴⁾。しかし批判の内實を検討すると、それらの弊害

文續編』卷16, 第1冊, 498~499頁)を参照。

- 149) 張集馨『道咸宦海見聞錄』,「(道光28年)首府衙門案件積壓甚多,屢催不結。因在臬署西院設發審局,豫於判稿,見官之暇,終日督率委員審理各案,既可得真情,又可致不致拖延」(96頁),また高遠拓兒『清臬署珍存檔案』と湖北按察使黃彭年」を参照。
- 150) 繼昌『柏垣瑣志』,「湖北督審局設在府署。向只有委員到局問案。多因無所稟承,又不敢輕用刑,往往犯人翻供,案不能定,輒以拖延置之。餘乃日到局中,親督委員鞠問。同官訝為數十年所未有」(1-a~1-b頁)を参照。また、高遠拓兒『柏垣瑣志』の世界——清末地方司法と署理按察使繼昌」を参照。なお、繼昌によれば當時の湖北省では裁判に当たる「局」は「督審局」であったが、「發審局」と同様の仕事をし、「讞局」と呼んだ例も見られ、実際にはただ名前の違いであると考えている。繼昌『柏垣瑣志』,「襄陽李六毆死周卯案。府縣按謀殺率問擬招解,督同讞局委員覆訊(後略)」(8-a頁)を参照。
- 151) 注意すべきは、大多數の發審局の官僚は候補官であるが、彼らに勤務経験がないとは限らない。例えば、事例3に登場した清鎮縣知縣の吳氏については、常恩の書信から、彼が省城の發審局に勤めており、清鎮縣に歸り案件(道光27年9月,駱家橋稅關の役人たちに對する傷害事件)の取調を指示したことがわかる。『復清鎮縣吳』(前掲『稀見清知府文檔』第1冊,222~223頁)を参照。なお、發審局など臨時機構が督撫の幕僚という性格を持ち發審局に勤めた幕友もいるが、裁判にあたる「委員」たちは幕友ではなく、官僚である。前掲李貴連・胡震『清代發審局研究』,また關曉紅『從幕府到職官』(19~20頁)を参照。
- 152) 清代後期,各省はさまざまな臨時的な機構を設け、候補官を配屬した。發審局のほか、釐金局などの機構もある。Philip Yuen-sang Leung, *Crisis Management and Institutional Reform: The Expectant Officials in the Late Qing*, *Dragons, Tigers, and Dogs: Qing Crisis Management and the Boundaries of State Power in Late Imperial China*, edited by Robert J. Antony, Jane Kate Leonard. Cornell University, 2002, pp 61-77.
- 153) 一方、發審局の官僚が原審官に返信するとは限らない。史料5からは、貴陽府知府の周作楫が常恩に返信しなかったことがわかる。
- 154) 徐珂『清稗類鈔』,「發審局判訟事。各省有發審局承審案件,爲京控之發回原省以交局者,或上控之提審交局者,而莫不以候補道爲總辦,候補府爲提調,候補同通州縣爲承審員。承審員有定額,承審數年,輒得署缺以去。若輩類皆夤緣進身,絕無法律知識,自號老吏,惟以鍛鍊迎合爲事,不則亦顛預伴食,一任吏胥之舞文弄法而已。要之,一案到局,無有即審即結者,窮年累月,人民且求死而不得也」(第3冊,977頁),また包世臣『安吳四種』,「與次兄論讞獄書(中略)我走過多省,見讞局中能員坐堂,但問問官亂喝亂叫,先教供後逼供,箠楚無數,號慟盈廷。是非曲直安得不顛倒乎(後略)」(2241頁)を参照。

は決して發審局のみに限られたものでも、發審局ゆえのことでもないことは直ぐに判明する。

まず、當時でも現代でも、取調が行き詰まったときに拷問をすることがよく見られる。拷問がよく見られたことは、發審局の弊害というより、裁判に当たる官僚が案件を解決できない時によくしでかすことだと理解する方が適當だろう。

次に、發審局の官僚が上司の言いなりになって行動すること（つまり「惟、鍛鍊と迎合を以て事と爲す」の「迎合」）がよく見られた背景は、處斷の權限を發審局の官僚ではなくその上司が持っていたことにある¹⁵⁵⁾。要するに、發審局の官僚はただ省レベルの官僚の代わりに取調を擔當する者であり、處斷についての建言を出す權限だけあり、最後の處斷は上司の意見によって決められるのは言うまでもない。道光 27（1837）～28（1838）年頃の湖北省武昌府知府の書いた判牘から、「首府」が省レベルの官僚のところに「看語」を持ち込んで省レベルの官僚によって處斷を下したことがわかる¹⁵⁶⁾。

ただ、發審局の官僚には裁判に對する影響力がある。直隸總督だった曾國藩によれば、發審局に裁判させた場合は、發審局の官僚が行う取調（「看卷」、「過堂」、「開節略」）と再び審問して處斷を下すこと（「再審」、「定案」）で、最も重要な一環は、發審局の官僚と省レベルの官僚が裁判について討論すること、つまり「議獄」である（「緊要工夫全在議獄一次及初訊一二堂」¹⁵⁷⁾）。數回「議獄」をした例も見られた。例えば、道光 20（1840）年に陝西省郿縣で起きた軍人が寄付金を求めた生員を毆ったことをめぐる案件¹⁵⁸⁾について、西安

155) 前掲繼昌『柏垣瑣志』,「湖北督審局設在府署」を參照。

156) 當時、武昌府に發審局か督審局という機構を設けたかは不詳であるが、「首府」が京控案件を審理していたことから、実際には他の史料に見る發審局のように裁判を行っていたと言える。不著撰人『京控承當各案看語不分卷』,「開■安陸縣民人陳學鴻京控程輾瑞等包攬錢糧一案看語（中略）是否允協，理合解詳，候憲臺會核」（第 1 冊，1-a～4-a 頁）を參照。なお、當時の武昌府知府について、「縉紳全書（道光 27 年夏）」,「（湖北）武昌府，知府加一級。劉源濬，順天永清人，乙未，二十六年十二月授」（前掲『清代縉紳錄集成』第 18 冊，111 頁）を參照。

157) 前掲曾國藩「直隸清訟事宜十條」を參照。

158) この案件は、鳳翔府の知府は按察使司に事案を取り上げることを求めたが、李星沅は拒否した。その後、當事者である千總は巡撫に訴え、巡撫は按察使司に命じ案件を取り上げさせた。ただ實際に裁判を擔當したのは西安府の知府であった。前掲『李星沅日記』,「（道光 20 年 6 月）廿四日（7 月 22 日）卯刻鳳翔守豫泰星階見，以郿縣抽炭嚴飭一案牽涉營辦，不能取供，稟請提省，雖意在慎重，亦未免推卸取巧。且此端一開，府案紛紛請提，尤非政體，談次即婉卻之（後略）」（81 頁），同「（道光 20 年 7 月）初一日（7 月 29 日）寅正詣文廟行香，咸甯隨至院。知郿縣斜峪關陳千總上中丞稟，自認以法繩縛秀才於廟，豫守爲某秀才師，意在袒護，請提省審辦，大勢已決裂，非據實辦理不能了，兩敗俱傷，無所爲姑息也（後略）」（84 頁），「（道光 20 年 7 月）初三日（7 月 31 日）卯刻奉院批發郿縣千總陳貴等呈控廩生王應泰一案，飭司提省審辦。秀才事不干己，輒出頭歛費刻碑，洵屬不安本分，至以兵丁」

「官は官を庇う」か

府知府の貴麟¹⁵⁹⁾は、しばしば按察使の李星沅と面會し、裁判の進捗を報告し指示を受けた。その背景としては、案件が複雑なために慎重に処理しなければならないことが挙げられる。つまり、發審局の官僚は裁判を擔當して事案の経緯をよく了解しているため、發審局の官僚は處斷の権限を持たなかったが、建言を出して上司の處斷に影響することができた。

そのため、上控に巻き込まれた地方官にとっては、發審局の官僚は局面を左右することができる人物だと言える。事例3・事例4の常恩が發審局の官僚に宛てた書信では、相手が実際には自分の下僚であっても（例えば、事例3に登場した清鎮縣知縣の吳氏）、相當に丁寧な言葉遣いをしていることが窺われる。その背景としては、發審局の官僚は原審の處斷の適切さについて上司に説明することができるし、更に上司の指示を伝える可能性があることが挙げられる。發審局は裁判のために設けられた専門機構であるが、私的なやり取りを行っており、その官僚は実際には原審官と省レベルの官僚との間の交渉役になった。

言うまでもなく、官僚が私的なやり取りによって交渉したり不正行為をしたり不適切な處斷を言い渡したことがよく見られた。事例4からは、發審局を管理している貴陽府知府の示唆のため、原審官の常恩が改めて稟を提出し處分を避けたことがわかる。とりわけ、發審局の官僚との私的なやり取りによって、原審官が上控の處斷権を持っている上司に案件の情報とその主張を伝え、後者の判斷に影響したことがよく見られた。その處斷が適切であっても、「官は官を庇う」と非難されるのは避け得ない。

鎖秀才竝叢毆有傷，該辨不能約束，乃公然不諱徑稟節轅，尤爲膽大妄爲，法宜懲治。聞之咸甯令西鳳營兵一千三百餘名情狀甚跋扈，多教匪投誠得辨目者，廩生王應泰亦素不知自愛，豫守訊供時特喚至花廳面詢，又何能折服辨兵之心耶（後略）」（84～85頁），「（道光20年8月）廿三日（9月18日）卯正起。首府來復，西鄉章縣丞近無他好，鄆縣案兩造已有眉目不難了（後略）」（98頁），「（道光20年8月）廿五日（9月20日）卯正起。首府以次見，具道鄆縣抽炭案可了，朝邑姚洽，保安海齡，紫陽吳純各領飭知赴任，並以李西園所寄某人書言朝邑車行差費交姚令携往酌辦，大約仍照舊，三運幫費較八百少增，較二千少減，即可經久（後略）」（99頁），「（道光20年8月）廿六日（9月21日）卯正起。首府來遞鄆縣抽炭供摺（後略）」（100頁），「（道光20年10月）十九日（11月12日）卯刻起。過蘇溪署會審鄆縣抽炭案，陳千總貴人壯實，惜以失察去官，革兵張盛情凶勢悍，僅擬杖徒尙輕縱，廩生王應泰不安本分，自取毆辱，斥革不足惜（後略）」（124頁），「（道光20年10月）廿七日（11月20日）（中略）紫田侍者得女，頗以多瓦不歡，卽往賀之，談及鄆縣斜峪關兵役張勝如照威力制縛律止杖，今擬徒自以兵丁恃強滋事，須重懲示戒也（後略）」（126頁）を參照。

159) 「緝紳全書（道光20年冬）」，「（陝西）西安府，知府加一級。貴麟，滿洲廂黃旗人。軍功。十六年九月授」（前掲『清代緝紳錄集成』第15冊，350頁）を參照。

お わ り に

清代の後期において、地方官が上控をめぐってやり取りを行うことがよく見られた。とりわけ、中間機構の分守分巡道と専門機構の發審局が連絡・交渉のために活躍していた。分守分巡道と發審局は実際には官僚間交渉プロセスにおける重要な連絡点であった。

官僚が自分の勤務成績のために民衆の上控を勝手な行爲として不正行爲をしたことがよく見られた¹⁶⁰⁾。以上の事例から、連絡・交渉によって、裁判に当たる官僚が原審官の主張を聞き、上控の情報を伝え、どのように處斷するかについて討論し、さらに原審官の利益に配慮するように處斷を言い渡し訴訟を鎮壓することがよくあったことがわかる¹⁶¹⁾。その背景としては、省レベルの官僚が自分自身の利益に基づき下僚を弾劾しないように言い渡すことがよくあったことが挙げられる¹⁶²⁾。

上控は下僚の不適切な處斷を覆し民衆に適切な處斷を言い渡すように作られた制度であるが、連絡・交渉によって不適切な處斷を言い渡した可能性は高い。そこで、民衆には官僚間の連絡・交渉の結果に対する懷疑、また交渉役だった發審局とその裁判に対する非難がよく見られた¹⁶³⁾。その一方で、處斷に納得が行かない当事者が再び上控するこ

160) 例えば、光緒 18 (1892) 年、兩江總督のところで安徽省廬江縣知縣の「濫刑斃命」の一事案が裁かれた。總督の皇帝宛てに提出した奏摺によれば、知縣は裁判の時に拷問を行ったため財産紛争の当事者を死亡させたが、その不正行爲を辨護するため、稟を提出し上控の遺族が「訟棍」の教唆に従い勝手に訴えたという虚偽の情報を報告し、追及を要請した。不著撰人『督憲審結廬江縣命案供摺稿』,「奏爲審明已革署安徽廬江縣楊需霖被控濫刑斃命一案」を参照。

161) 前掲繼昌『柏垣瑣志』,「龔尙毅呈控縣書楊子臣因學院考試行賄招搖等情,學院批交長沙府審辦,數月不結,案內牽涉之言清華久不到案。龔尙毅屢控,謂言不到案由楊子臣主匿。豫訪聞龔係生員,夙不安分,藉端索詐,乃嚴切批斥。龔知其計不行,始斂跡,案結。此事在府縣只知案情重大未便深究,意欲遷就,龔則愈行得計,越拖延越生節,不如設法速了之爲是也」(18-a~18-b 頁)を参照。

162) 清朝の監察制度は上司に下僚を監督することを義務づけるが、上級官僚は自分自身の利益に基づき下僚を庇うことがよく見られた。その背景について、Philip A. Kuhn は「上級官僚が下僚を弾劾しなければ言官に弾劾されて皇帝の信任を失うかもしれないが、弾劾すると下僚の恨みを買って摘發される可能性があると考えられていた」と指摘している。Philip A. Kuhn, *Soulstealers: the Chinese sorcery scare of 1768*, Harvard University Press, 1990, pp. 197~pp. 201.

163) 劉汝驥『陶甕公牘』卷 10「稟查復警委任恆智被控文(中略)敬再稟者。竊查該商號德厚昌等控任恆智一案迭奉批發。原稟,抄稟二件,大致以三次具稟,知府不理。又以知府之隱情,特迫於洪廷俊一人之私函,不忍破除情面。其以私心測知府,無足深辨。獨該商號斷斷不休,痛詆洪紳,是其本意。竝非與任辨爲難,直與洪紳爲難。其挾嫌傾軋之情,已昭然共見。知府敢不避絮聒,再爲我憲臺陳之(後略)」(『官箴書集成』第 10 冊, 553 頁)を参照。

「官は官を庇う」か

と、さらに京控をすることがよくあった。訴訟の蒸し返しなど上控によく見られる諸々弊害の背景としては、地方官の働き方が上控の裁判に影響したことが挙げられる。

しかし、官僚間交渉プロセスは「官は官を庇う」ことだけを意味しない。各官憲の間で行う公的なやり取りが実際には上控制度の一環になったことから、地方官憲が有効に統治するために上控の情報を傳達したことが窺われる。もともと制度を作った目的は民衆の不満を聞き統治を維持することであったが、官憲はだんだんに統治を維持する手段として案件を終わらせることを重視するようになった。そこで、上控をめぐる連絡・交渉がよく見られるようになった。この現象は、「官は官を庇う」というより、「官と官は繋がる」と言える。要するに、上控は民衆向けの訴訟制度というより、官僚機構内部の統制制度の一環であると言える。

参 考 文 献

1. 史料

(1) 史書，律例，會典，省例

姚雨薌原纂，胡仰山增輯『大清律例會通新纂集成・刑部說帖・刑案匯覽附刊』，同治 10 年京師刊本。

『欽定大清會典』，光緒 25 年重修本。

『清史稿』，北京：中華書局，1977 年。

臺灣銀行經濟研究室編『福建省例』，南投：臺灣省文獻委員會，1997 年。

(2) 檔案

『內閣大庫檔案』，臺北：國立故宮博物院所藏。

『南部檔案』，南充：南充市檔案館所藏。

吳密察主編『淡新檔案』，臺北：國立臺灣大學圖書館 2006 年。

(3) 地方志，傳記

鄭鵬雲・曾逢辰『新竹縣志初稿』，臺北：臺灣銀行，1959 年。

『新竹縣制度考』，臺北：臺灣銀行，1961 年。

『新竹縣采訪冊』，臺北：臺灣銀行，1962 年。

陳培桂『淡水廳志』，臺北：臺灣銀行，1963 年。

『重修臺灣省通志』，南投：臺灣省文獻委員會，1998 年。

清華大學圖書館，科技史暨古文獻研究所編『清代縉紳錄集成』，鄭州：大象出版社，2008 年。

(4) 文集

不著撰人『京控承當各案看語不分卷』，鈔本，東京大學東洋文化研究所圖書館所藏。

不著撰人『督憲審結廬江縣命案供摺稿』，光緒 18 年刊本，上海圖書館所藏。

英文『嶽寶公牘』，光緒 26 年刊本，北京大學圖書館所藏。

繼昌『柏垣瑣志』，光緒 29 年刊本，神戶市立中央圖書館吉川文庫所藏。

- 薛允升『讀例存疑』，光緒 31 年刊本，京都大學文學部圖書館所藏。
- 葛士浚『皇朝經世文續編』，臺北：文海出版社，1966 年。
- 包世臣『安吳四種』，臺北：文海出版社，1968 年。
- 張集馨『道咸宦海見聞錄』，北京：中華書局，1981 年。
- 徐珂『清稗類鈔』，北京：中華書局，1984 年。
- 李星沅『李星沅日記』，袁英光・董浩整理，北京：中華書局，1987 年。
- 劉汝驥『陶甓公牘』12 卷，宣統 3 年安徽印刷局排印本，官箴書集成編纂委員會編『官箴書集成』第 10 冊，合肥：黃山書社，1997 年。
- 『稀見清知府文檔』，北京：全國圖書館文獻縮微複製中心，2004 年。

2. 研究

(1) 著作

- 臨時臺灣舊慣調查會『清國行政法』，東京：汲古書院，1972 年。
- 滋賀秀三『清代中國の法と裁判』，東京：創文社，1984 年。
- 小川尚『明代都察院體制的研究』，東京：汲古書院，2004 年。
- 林玉茹『清代竹塹地區的在地商人及其活動網絡』，臺北：聯經出版事業公司，2000 年。
- 柯志明『番頭家：清代臺灣族群政治與熟番地權』，臺北：中央研究院社會學研究所，2001 年。
- 謝忠志『明代兵備道制度：以文馭武的國策與文人知兵的實練』，臺北：明史研究小組，2002 年。
- 梁元生『上海道臺研究——轉變社會中之聯係人物：1843~1890』，陳同譯，上海：上海古籍出版社，2004 年。
- 李典蓉『清朝京控制度研究』，上海：上海古籍出版社，2011 年。
- 苟德儀『川東道臺與地方政治』，北京：中華書局，2011 年。
- 邱捷『晚清民國初年廣東的士紳與商人』，桂林：廣西師範大學出版社，2012 年。
- 吳吉遠『清代地方政府司法職能研究』，北京：故宮出版社，2014 年。
- 關曉紅『從幕府到職官』，北京：生活·讀書·新知三聯書店，2014 年。
- Philip A. Kuhn, *Soulstealers: the Chinese sorcery scare of 1768*, Harvard University Press, 1990.

(2) 論文

- 戴炎輝「清代臺灣における訴訟手續きについて——淡新檔案を資料として」，『國家學會雜誌』第 81 卷第 3・4 號，1968 年，117~131 頁。
- 鈴木秀光「詳結——清代中期における輕度命盜案件處理」，『法學』第 63 卷第 4 號，98~134 頁。
- 高遠拓兒「『清臬署珍存檔案』と湖北按察使黃彭年」，『法史學研究會會報』10，2005 年，56~70 頁。
- 高遠拓兒「『柏垣瑣志』の世界——清末地方司法と署理按察使繼昌」，『人文研紀要』第 55 號，2005 年，69~91 頁。
- 阿風「清代の京控——嘉慶朝を中心に」，井上充幸譯，夫馬進編『中國訴訟社會史の研究』，京都：京都大學學術出版會，2011 年，332~379 頁。
- 鈴木秀光「清代嘉慶・道光期における盜案の裁判」，『專修法學論集』第 121 號，2014 年，1~48 頁。
- 楊一凡・劉篤才「中國古代匭函制度考略」，『法學研究』1998 年第 1 期，79~91 頁。
- 邱捷「同治，光緒年間廣東首縣的日常公務——從南海知縣日記所見」，『近代史研究』2008 年第 4 期，29~44 頁。
- 李坤「道光，咸豐時期貴州知府的官場交往——從『安順黎平府公牘』所見」，『貴州文史叢刊』2010 年第 4 期，56~63 頁。

「官は官を庇う」か

Philip Yuen-sang Leung. Crisis Management and Institutional Reform : The Expectant Officials in the Late Qing. Dragons, Tigers, and Dogs : Qing Crisis Management and the Boundaries of State Power in Late Imperial China. edited by Robert J. Antony, Jane Kate Leonard. Cornell University, 2002. pp 61-77.

附録 1：道光 27 年に貴州省安順府で起きた徴税をめぐる案件

(便宜上，内容に應じて段落に分ける)

史料 1：致首府周。

(時點不明。『稀見清知府文檔』第 1 冊，123～129 頁)

小湖大兄大人閣下，午節一函布賀，諒已早邀青照矣。當此蒲磬初拂，荷氣方來，聽順時之布化，知撫序以延釐，翹首黃堂，曷勝忭頌。

茲啓者，昨于月之初二日接奉大移，以貴築縣屬札佐鹽行永益號瞿義順等具控李老么等違禁截奪等情一案抄錄原詞，關提被告人等赴案質訊等因。弟隨查四月十四日，據駱家橋書巡劉松林等稟稱，在鎮南州屬鷄窩寨松樹林地方查獲左小二等私鹽十三挑十九駝，共二十六包半，約重二千六百餘觔。左小二即時逃逸，當將脚夫王麻三等及鹽觔解案。訊據各脚夫供稱，都係安平落鍋場隔挑坡及白岩大凹等處住民，左小二與楊三合夥販鹽，伊等幫挑。自札佐場得領鹽觔，都是繞路私行走漏，並沒上過稅銀等供。取結保候，一面查傳左小二等。旋據稅書劉松林等續稟，四月二十日楊三，李雙等多人擁至稅關兇鬧，任意辱罵，將關內棹機掀倒在地，並言照前再用銀二百上控拖累等語，隨將楊三等交安平縣差役解案等情。隨訊據楊三等供稱，向來販鹽在貴陽上稅，行銷長寨，廣順等處，並不走安順道路。因脚夫一時無知，繞小路偷走，被巡役在鎮南所屬松樹林地方將脚夫等拏獲解案，至二十日蟻等赴稅關領鹽，因行走荒張，衣袖將棹機絆倒，並非鬧關等供。據此，該販等雖未直認，而肆行無忌之狀與影射偷漏之弊已可概見。是以將其薄責示懲，將鹽給領。

詎該鹽販等狡展逞刁，串通鹽行，倚恃財豪，捏控違禁截奪，經貴府關提被告人等。除所控之被告李老么，吳老二，熊大五，黃老二，差查並無其人，且查該原告陳聚豐等詞稱札佐之鹽向發定番，羅解，長寨，廣順等處行銷，從未越安順地方等語，續詞又云脚夫多屬安順民人，便由家內後運廣順，所行之路係向來便由，除此別無道路可行各等語。查，札佐之鹽如果各販在貴陽上稅，運往廣順等處，應由大路行走。或取小路，便捷平坦，勢必繞行。查，自省至廣順大路共計一百二十五里，既近且平，而巡役獲鹽之所係在鎮南所屬之松樹林，由此至鷄窩寨，過土門寨，穿越曾周馬場，至廣順州，不惟山路崎嶇，計里一百六十二，較之平直大路尚遠三十有零，似無捨近求遠棄平就輻之理。該原告所稱脚夫便路由家，明係摭拾之語。況脚夫並非該處住民，至云別無道路可行，更屬朦混之詞。

總之該鹽販楊三等非影射漏稅，即越境販私。弟准移不難，將控之丁書人等解交冰案一質。弟恐此後之刁風愈熾，而越關漏稅之弊不可勝言矣。弟雖初膺外任，斷不敢縱放丁書人等格外搜求，致滋不美。想吾兄卓識過人，明察素著，用敢先為縷陳巔末。即有干人地未諳之處，尚冀星照四方，關垂逾格。此案如必欲訊究，弟自當親身押解丁書人等來省面領指示一切也。特此即請升安。希惟澄照，佇望聽音。不一。

史料 2：致首縣曹。

(時點不明。『稀見清知府文檔』第 1 冊，119～122 頁)

子祥大兄大人閣下，魚雁雖通，芝輝遠隔，與日偕增。頃閱閣下致野漁，見山兩兄一函，云云，足徵關愛情殷，殊深感佩。

惟各鹽販之狡詐，情殊可惡。到案復敢刁抗，致被掌批其頰。數亦僅止三十。前閱貴陽呈詞先後，已覺其自相矛盾。弟隨將該脚夫王麻三等供詞，楊三等鬧關，竝獲鹽處所及道路遠近之情形，逐一據實函致首府。茲閱上控藩轅之詞，則又添砌酷刑殘虐，加倍勒徵等語。前後三詞不一，其捏固不待言。總之鹽行照引自係應行貴陽各屬銷售，但已賣與小販，誰能必其不繞往他屬也。況王麻三呈出之票係買自札佐，竝未指定到廣順售賣，亦未指係何行收售，是以繞行小道，至鎮甯所屬之松樹林。若非拿獲，又誰信其不在鎮甯一帶售賣也。此拿彼竄，明係影射其間，而該行只圖暢銷，不問小販之越境，尚敢挺身袒庇，連名捏控，顯係倚恃人衆財豪，不顧各關之稅課。彼獨不思既無印票可憑，倘各挑夫挑赴雲南，亦可稱已在貴陽過稅矣。有是理乎。有是例乎。且查該鹽行初詞內稱從未越安分地方售賣，又云僱夫左老四等挑發。弟思既係挑發，票內何寫某人買鹽若干包。續詞又云脚夫多係安順住民，其實竝無一人居住該處。種種虛情。想吾兄卓識過人，多才素著，其中之情弊，自係一目了然。除崇四兄等另函布覆，竝抄錄前致首府信稿，毋庸贅述外，特此布謝。即請升安，統希心照。不一。

史料 3：普定縣崇致首縣曹一函。附錄，五月十六日發。

（道光 27 年 5 月 16 日。『稀見清知府文檔』第 1 冊，109～111 頁）

月之望日接奉示函，祇聆一是。當將抄詞及面諭家丁之詞婉稟，太尊深感關照至意，囑為致覆。

緣此事先經書巡劉松林等具稟在鎮甯所屬小路地方查獲私鹽約二千六百餘觔，解案，訊據脚夫王麻三供稱左小二，楊三合夥販鹽，伊等幫挑，自札佐場領鹽，繞小路私行漏稅等語。旋經楊三赴稅關兇鬧，又經獲案。據楊三供稱鹽在貴陽上稅，行銷長寨，廣順等處，因脚夫無知，繞小路行走，致被盤獲等語。因查果往廣順，不應行走鎮甯路徑，明係飾詞。且不應鬧關。太尊隨將其薄責，鹽包仍行給領。昨因貴陽關提瞿義順等控案人證，太尊曾詳細函覆。刻下太尊之意，不惟安順勢難挽回，即能，亦不成事。惟有專候首府回音，將被告解省質訊。或稟大憲，委員查勘地道，定須水落石出，以免奸商日後之影射也。所有前函抄寄查閱。

崙此布覆，敬請升安。統惟心照不一。

史料 4：致清鎮縣吳。五月十六日發。

（道光 27 年 5 月 16 日。『稀見清知府文檔』第 1 冊，112～114 頁）

檢齋仁兄大人閣下，咫尺芝光，為雲間阻，馳企之私，時縈五內。

茲啟者，頃閱子祥兄致崇墅漁等一函，因弟處鹽案，各商控奉藩轅發局訊辦。弟雖將此案先後一切情形函致首府，縣外，想吾兄亦必有見聞，但弟一己之見，恐有未周。或係丁書一面之詞，亦不可不作退一步想。此案既經發局，惟在閣下權衡。想吾兄星光四射，多情勝我十分，自能酌量情形，不致彼此決裂。如原告必欲強橫固執，或恃財狡橫，尚祈面回方伯，揀賢委員，明勘獲鹽之區，暗訪居民之言，究係何府所屬，地界一清，而兩造之是非可期不辯自明矣。

特此布懇，即請升安，諒希心照不一。

愚弟常○頓首。五月十六日發。

史料 5：覆清鎮縣吳。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第 1 冊，114～115 頁）

檢齋大兄大人閣下徑覆者，頃展采雲，備悉一切。至前承翰示，本應即覆，因候首府，縣之還雲再為擬答，竝非坐省處壓擱耳。至弟前函，已邀洞照。惟獲鹽之所，恐有不實不盡之處，復委經歷黨八兄前往查勘界址，竝詢該處附近居民是日獲鹽情形。現據委員協同該處鄉約指實，繪具圖說，委係鎮

「官は官を庇う」か

甯所屬鷄窩寨松樹林。即該原告所稱之曾周馬場亦係鎮甯州屬，竝非貴案管轄。惟弟至今尚未接到首府，縣之覆音，不知何意。茲承關注，用以附聞。

覆請升安，竝璧芳版。統希心照不一。此函未知何月日所發。其原稿未注。

史料 6：致首府周。此函未知何月日所發。其原稿未注。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第 1 冊，115～116 頁）

界連咫尺，仰光儀於雲漢。郵筒上下，藉楮墨以傳宣。邇惟小湖大兄大人順時納吉，撫序迎床，翹企喬雲，忭頌奚似。

頃接大移，以奉憲批飭瞿義順等具控一案被告人等解訊等因。弟當即差傳去後，除被告之熊大五等竝無其人，前函業經布達。所有指名之巡役廖永年，現在實患瘡疾病症，已經飭醫趕緊調治，就痊即行解省候質。除另備公函，竝具稟藩憲外，特此即請升安，希惟垂鑒不備。

愚弟常○頓。

史料 7：致貴陽府。

（道光 27 年 7 月 13 日。『稀見清知府文檔』第 1 冊，136～138 頁）

小湖仁兄大人閣下，久未修候，馳企時殷。

昨接綬堂先生來函，以瞿義順等上控截鹽一案，貴府業經查明地界，實係在松樹林被獲，藩憲閱稟亦已了然，囑弟將前次到案之小販王麻三等傳集，連卷移解冰案，質訊究結，用懲刁風，至書役廖永年等，現既患病，即不必解，免其拖累等因。足徵明察。若輩得以迎邀憐憫，即弟亦實深感佩。惟查該脚夫王麻三等，彼時訊明取結後，當即省釋。除現飭安平縣差傳，到案後即當連卷一併移解。至被責之小販楊三，前供係貴案屬民，弟處無憑傳提，可否飭令該原告趕案備質，實為公便。特此先為布達，即請崇安。希惟諒照不宣。

史料 8：附陳景溪信後數語。與前同日發¹⁶⁴⁾。

（道光 28 年 1 月 6 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，1243 頁）

再者安順鹽案深費清心，五中感綫，惟有永矢弗諼而已。

附錄 2：道光 30～咸豐 1 年に貴州省安順府で起きた差役の收賄をめぐる案件

（便宜上，内容に應じて段落に分ける）

史料 9：致永甯州陳。

（道光 30 年 8 月 10 日。『稀見清知府文檔』第 2 冊，717 頁）

景溪仁兄大人閣下徑啓者。貴屬紳民吳炳南昨以■衆搶獲等情續控阿酋等到府。查該處距府城較近，除一面備具公牘知照貴處外，隨即選派差役速往彈壓。茲復據吳炳南等以統衆圍寨具續前來，核査情

164) 「致黔西州蔣綠汀，坐補定番州陳景溪，邛水縣丞后花農，臬監印桂香谷，松桃廳李南枝。同稿。賀年並敘到任。與前同日發」（『稀見清知府文檔』第 3 冊，1242～1243 頁）を參照。「與前同日發」の「前」は，「致安順提臺各營員道謝竝賀年禧。正月初六日發，外封填臘月廿日（後略）」（前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，1237～1238 頁を參照）である。

詞，恐釀巨案。祈閣下速派幹役至彼彈壓，以杜爭端而安閭閻。是爲禱。此布即請升安。不一。

史料 10：附藩臺稟¹⁶⁵⁾。

(咸豐 1 年 1 月 26 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，883～884 頁)

再養馬寨之案，現在竝無爭鬧情形。除行文各州縣嚴拏呈唆之吳永壽，王英二名外，竝仍懸賞購線，設法密拏，務期弋獲辦理，以儆刁頑。

知閱憲陳，合併附陳。

史料 11：附首府信後。

(時點不明。『稀見清知府文檔』第 3 冊，884 頁)

再者，昨接石珊兄來函，以省中風聞敝屬養馬寨械鬪之事，云云。查此案主唆之吳永壽，王英等二名雖經逃匿，養馬寨不過倚衆自固，冀圖分肥而已，竝無他故。現在除行文各屬嚴拏外，弟仍懸賞密緝，務期捕獲懲辦，以儆刁頑。

知閱歷念，用特附陳。如各憲詢及此事，即請代爲回明是荷。

史料 12：致鎮甯州石。二月十四日。

(咸豐 1 年 2 月 14 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，903 頁)

敬啓者，風聞尊處大山哨地方，近有匪徒藉養馬寨爲名搶劫菸土之事。因思貴治爲往來通衢，現當大差絡繹之際，且制軍不久即須過境，設使以訛傳訛，殊爲不美。用途特函布達，即祈設法辦理。或改裝扮作菸販親往誘拏。倘須與弟會緝之處，須祈示知爲請。此布會同協緝也。

此布順請升安。不一。

史料 13：致永甯州陳。

(咸豐 1 年 2 月 24 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，925 頁)

景溪大兄大人閣下，昨奉手書，備聆一是。

茲啓，此養馬寨之案現奉藩，臬憲提省審辦，竝委嚴珊漁大兄在此守提，用特致函布達，祈將此案在押之盧小■等點交原差解府，以便飭令該原差協同解省也。萬勿稽延是幸。除另備公牘外，特此敬請升安，竝璧芳版。不一。

再，尊處王志幅一案，業已核轉矣。

史料 14：致首府王

(咸豐 1 年 3 月 2 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，935 頁)

蓮浦仁兄大人閣下，日昨珊漁帶案晉省，曾布一函，諒邀青照。現在陳及炳，唐高已緝另案回署，飭其即赴轅聽候。想閣下必能垂情一切也。

此布即請升安，不一。

165) この書信は目録では「致謝首府王」(前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，884 頁)の附録として書かれているが，實は「謝撫藩臺留飯稟」(前掲『稀見清知府文檔』第 3 冊，883 頁)の後に綴じられている。

「官は官を庇う」か

史料 15：復首府王。

（咸豐 1 年 3 月 5 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，939～940 頁）

（前略）再啓者，昨奉還雲，竝承寄回稟函一件。星微閱照，感服難名。查此案經珊漁往復數日，其說前云械鬪守城等謠，想閣下必已釋然矣。至唐高馳叩崇偕，吾兄大人定能垂鑒一切也。

此復再請升安。不一。

史料 16：致首府王。

（咸豐 1 年 4 月 1 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，967 頁）

敬啓者，現在拏獲養馬寨案內唆訟之吳永壽與報信之人，即係唐高同事。茲聞該役被押貴築，可否釋放，令其幫同偵探阿酋等下落之處。尚祈明■，■我爲幸。

此布即請升安，不一。

史料 17：復首府王。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第 3 冊，978 頁）

敬復者。頃頌來械，囑將阿酋，阿跳設法傳提等因。當即派差前往密提得。一俟獲日，自當移解冰案也。

此復即請升安。不一。

史料 18：致首府王。

（咸豐 1 年 4 月 22 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，979～980 頁）

蓮浦仁兄大人閣下，前復一械，諒邀青照。滇兵於十二，三，四等日過郡，沿途安靜，竝無貽誤。督憲於十五日到此，次藻前行。弟送出屬境，已於二十一日回署。尚無愆尤，堪抒綺情。養馬寨之案，晨下究竟若何。至敝役唐高，尚祈鼎力成全。是所祈禱。

此布即請升安。不一。（後略）

史料 19：復首府王。

（咸豐 1 年 4 月 23 日。『稀見清知府文檔』第 3 冊，981 頁）

頃接來函，囑將阿酋，阿跳趕緊解省，云云。現正加差嚴拏矣。惟唐高還祈垂情格外爲荷。

此布即請升安。不一。

史料 20：致清鎮縣王。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第 3 冊，981 頁）

相墅仁兄大人閣下，日前於蘆狄哨途次藉晤芝芬，判別匆匆，未及暢請，悵結莫似。

昨接首府來函，囑將阿酋，阿跳趕緊提解，云云。現正加差，云云。同前。

史料 21：附東道稟後。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第 3 冊，1012 頁）

敬再稟者。

日前憲尊過郡，向應多踈。歉疚之忱，非言可喻。所有養馬寨之案，昨曾縷陳憲聰，竝邀婉達上遊，未知邇日究竟如何。中丞之意，是否釋然。敢求訓示，是爲祈禱。

又，稟制憲稟內所有二字以下係發交呈詞，現正逐件清理，俟有端倪，即當承具稟聞。

至賽中堂督師，云云。

史料 22：復首府。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第3冊，1016頁）

敬復者。頃讀惠翰，備聆一是。

敝役唐高，並非弟有意愛惜，實覺此案與伊等似無牽澀耳。

此復即請升安。不一。

史料 23：復首府。

（咸豐1年5月4日。『稀見清知府文檔』第3冊，1019頁）

蓮浦仁兄大人閣下，頃奉復函，備聆一是。

所有阿酋，阿跳二名，疊經飭派原差前往緝提，並令勒限趕緊解案。茲據該役稟報，阿酋等業已自行投審。想到省定可釋然結案也。至敝役唐高，並非弟有意愛惜，實覺此案與伊等毫無干澀，故不得不為之剖白。尚祈閣下秦鏡高懸，不勝感禱之至。

此布即請升安。不一。

再，廖伊翁將來北上有期，弟自當竭力致送也。

史料 24：致首府王。

（咸豐1年6月2日。『稀見清知府文檔』第3冊，1039～1040頁）

敬啓者。昨以歸化于小五之案，曾布一函，諒邀青照。敝處連日疊獲透雨，地方亦屬安靜，堪慰錦懷。所有養馬寨之案，不知如何定讞，尚祈示知為禱。

再，鎮甯州前雖稍有搶奪菸泥等事，而石竹生奮勇捕緝，現已拏獲首犯周大五等數名，盜賊亦頗斂跡。弟已諄諄函致務要淨根株，邇日正當喫緊之際，誠恐上憲若有撤動信息，轉竟難於呼應。還祈吾兄大人春風噓拂，如上遊果有此意，務希婉達一切。若能令其一手辦理，似於捕務不無稍有裨益也。

此布即請升安。不一。

史料 25：致首府王。

（時點不明。『稀見清知府文檔』第3冊，1073頁）

敬啓者。頃接梅村信函，藉知敝役唐高已蒙成全備至，從輕辦理，並作弟處先事竟發，可免吏議。於此可見憲見高厚，與吾兄閣下大人遇事閱垂之玉意。此種盛謝，豈語所能盡述耶。此布即請升安。不一。

「官は官を庇う」か

史料 26：稟藩憲。

(時點不明。『稀見清知府文檔』第3冊，1087～1088頁)

稟訪聞府役唐高有向靈阿酋等嚇詐銀兩，訊明追繳，請一併解省審辦由。敬稟者。竊照卑屬永甯州民人吳炳壽等與苗民靈阿酋等互爭養馬寨莊業一案，據奉撫憲批飭卑府會同永甯州提訊，當行據永甯州將被告靈阿酋，靈阿跳等提解到府，取保在店候訊，竝措府役唐高看守。旋經〔旋丁〕¹⁶⁶⁾卑府訪得唐高有向靈阿酋等勒索■銀三十餘兩之事，當即提訊屬實，將贓追給靈阿酋等領回。正在詳辦間，復據兩造赴省上瀆，奉批提省審辦。合將該役唐高一併申解，聽候憲臺委員訊究，實爲公便。爲此具稟。恭請憲臺伏乞垂鑒。

史料 27：復首府王。

(時點不明。『稀見清知府文檔』第3冊，1088頁)

頃奉來械，備聆一是。惟以弟被劾之舉，謬荷廉飾，感愧之至。所有唐高一案，茲已遵諭照稟矣。種種關垂，惟有謹錫心版，永矢弗諼而已。承此鳴謝，敬請升安。不一。

附呈稟函一扣，祈閱後飭役代投爲荷。

166) 「旋丁」二字の上に小さいな墨の點がある。その意味は不明である。